
異世界冒険譚（あなざわーるとあどベンチャー）

Riko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなざわーるとあじべんちやー
異世界冒険譚

【Nコード】

N5959W

【作者名】

R i k o

【あらすじ】

女子高生・松浦里菜がある朝目覚めたら、そこは檻の中だった：！！？どうやらそこは異世界のプリチュという国。その魔王と呼ばれる王様は、顔を見ると死ぬ、という噂があるらしい。その魔王に顔を見せるぞ！それで死ななかったら王妃になれ！と無茶を言われた里菜は、死なない自信はあるけど、結婚するのも嫌だ！と、人質になっていた隣国の王子やその従者と一緒になってプリチュ王国を逃げ出すが……。

※ 過去に一部自費出版したことがある作品を完結させようと思っ

て自サイトで書き始めました（したがって重複投稿です）。

一、鍵つきの部屋の中の錠つきの檻の中で

ある朝目覚めたら、そこは檻の中だった……。

十秒ほど目をつぶってみた。……開けた。

うーん、見間違いではないらしい。

ちよっとほっぺをつねってみた。痛い。

うーん、夢でもないらしい。

そうだ、それに考えてみれば私って、ほっぺたをつねるって事を思い付くって事自体、現実だという証拠だっていう持論の持ち主だったわけ。っていうことは……やっぱこれは現実なんだ。

私、松浦里菜。高校三年の十七歳。――万が一、罪を犯したりしていても、十分少女Aで済む年齢。

なのに、この状態はなんなんだ……。

頭を悩ませていたら、足音が聞こえた。それとともに一つの、疑問解決策が頭に浮かんだ。ここに来る人に尋ねればいいんだ、とい

う、ごくごく単純な解決策。

足音は、ますます近付いて、この檻のある部屋のドアの前で止まった。

ドアの鍵を開ける音がし、——けど、なんていう嚴重さだろう！檻には錠、部屋には鍵。私は余程の凶悪犯なんだろうか……。——そして人が入ってきた。

……なんだ？おい、私は髪を真っ青に染めた奴なんか趣味じゃないぞ！大体、そんな派手な頭した奴が公職についていいのか？……と、あれ？公職じゃないのかもしれないなあ。

私は今まで、私が悪人ってケースしか考えなかったけど（だから檻の外の人は公務員だろう、と思ったんだけど）、反対のケースも考えられるわけだ。——つまり、私を檻に入れた人のほうが悪人だってケース。けどうちは身代金目当てに誘拐されるような金持ちじゃないし、金目当てじゃないにしても——あの後生楽なうちの両親が、子どもをさらわれる程恨まれてとは思えないし。ましてや私は何かの事件の目撃者とかでもないし、ただ家で寝ただけなのに人質にとられたわけでもないだろうし。……うーん、やっぱり訊いてみるのがいちばん手っ取り早いわ。

で、声をかけようとしたら……閉口してしまった。何故か、という、部屋に入ってきた人（どうやら食事を持ってきたらしい）が、いきなりもののすごい早口で喋り始めたから。——それもどこのなんだかわからない言語で。

——何を言われているか、はわからない。けど悪口を言われているのはわかる。人間なんてものはわりかし悪口には敏感なものらしいしね。大体、あの顔を見て、誉めているんだ、なんて言われても誰が信じるもんか！

全く。これで唯一の解決策もダメになっちゃったじゃないか！

あ、だんだん腹がたってきた。勝手に閉じこめられて、理由も教えてもらえず、その上、なんで悪口まで言われなきゃならないんだ

！おとなしく聞いていることはない。叫んでしまえ！

「わけのわからん言葉で人の悪口言わんでくれ！！！」

向こうにもこっちの言葉は通じなかったに違いないがあまりの剣幕に恐れをなしたのか、その男は檻の向こうに食事を置いて、さっさと退散した。

食事つつたって、そんな大したものではない。パンらしい固形物と木の器に入った透明な液体が、木製のお盆にのっかっているだけ。

うーん、私、ロールパンの類って焼かないと食べられないんだよね。食パンなら焼かなくても何とか食べられるんだけど。

だからこの液体だけいただこう。――多分水だよね。変なもの入ってないだろうなあ。

で、檻の隙間から手を伸ばして器を取って、ごくつと一口。――あら、この水おいしいわ。薬くさくないというか。

もう一口、ごくつ。

それにしても、一体ここはどこなんだろう？

一、鍵つきの部屋の中の錠つきの檻の中で（後書き）

最初の一行は本当は序章なのですが、一行での投稿ができないので、第一章の第一話とくつつけました。

二、ありそうになくともある国の

先程の男が、手に何か機械らしき物をのせて戻ってきた。どうやら、私の剣幕に恐れおののいて逃げ帰ったというわけでもなかったらしい。

ふむ。さっきは混乱してたせいか髪の色にしか気付かなかったけど、こいつってば服装も変だ。ファンタジー系の漫画あたりで兵士が着てるような服だもん。少なくとも現代服じゃあない。……まさか、これが今のはやりだってことはないよね。私、流行には疎いけどさ……。

その男は、手のひらの上の、四つの機械のうち、二つを檻ごしに私に渡し、残り二つを慣れない手つきで自分の耳にはめた。そして、どうやら私にも同じようにしろ、と身振り手振りで言ってるようなので、私も両耳にはめた。感じとしてはイヤホンに似てる、かな。イヤホンにひもがついてなくて、かわりに金具がついていて、その金具で耳たぶにとめるようになってる。

「女、わかるか？」

と、その男の声が日本語になって聞こえた。

どうやらこのイヤホンもどきは翻訳機らしい。便利なものだ。こんな物がいつ世の中に出回ったんだろう。通訳さん可哀相に。失業するな。

「おい、女」

……女、などと呼ばれてむっとしたので、ぶすつと答えた。

「何よ、聞こえてるわよ」

「お前は魔だな？」

思わず、一瞬絶句。

「……あんた、頭大丈夫？何をどうしたら、そーゆー滅茶苦茶な発言が飛び出すのよっ！」

「魔じゃないというのなら、言ってみろ。どこの国の者か、何故王

子の前に現われたか、どうやってあんな風に突然出現できたか」

「――出来るだけ忠実に答えたげるわよ。私は日本国ってところの者で、あとは知らない」

「……そのどことが忠実なんだ?!」

「知らないもの、知らないって答えんのが一番忠実でしょうが! 大体、ここがどこかすら知らないつつうのに。――ま、言語からいっても、王子なんてのがいるらしいことからいっても、日本じゃないらしいけど?」

「ここはプリチュ王国の王宮の地下牢だ。お前はいきなり中庭にいた王子の目の前に現われた。それで王子の護衛をしていた俺がここに運んだ」

「ああそう。そりゃ御苦勞様」

と、私はぶいっと横を向いた。こーゆー事態の起こり得る可能性を、もう一つ思いついたからね。――だけど、わざわざ自分ちの布団で寝ていた私を起こさないように運んで牢の中に入れて、こーゆー大がかりな芝居をやるような心当たりは、ない。

だけど、私がどこかの王子様の前に突然現われた、なんてことを信じろって方が――

でも、現実・らしい。

あううっもう開きなおってやる! (もう既に開きなおってる気もするけど)

「おい、女」

「何よ、女女ってうるさいわね、男。確かに私は女だけど、ちゃんと松浦里菜っていう固有名詞があるんだからねっ!」

「まつうらりな? 舌を噛みそうな名前だな……。不便このうえない」

「呼ぶ時は里菜でいいの! 松浦は家族名称なんだから。もっとも家族名称で呼ぶ人の方が、日本じゃ多いけどね」

「ややこしいな。――おい、りなとかいうやつ。お前は、そんなのがあるわけがないとすぐわかるような国名でも、一応答えた、ということは、自分が魔だと素直に認めるつもりはないんだな?」

「魔じゃないんだから、素直に認められるわけないでしょうが！それに日本っていう国だってありそうになくともあるんだから仕方ないじゃないの！」

大体、プリチュ王国なんていうの方が聞き覚えないわよ。

「——お前があくまでそういう態度をとるのなら、王の御前に連れていくよう、命ぜられているのだが」

「あっほんと？私、王様って会ったことないから会ってみたい」

「……おい、ロッフ王だぞ？人なら誰でも、その顔を見るだけですぐさま死に至り、魔ですらひれ伏すと言われる、ロッフ王だぞ？——この世界の者で知らぬ者など、生まれたばかりの赤ん坊くらいのものだぞ」

「……私知らないよ、そんな王様」

「……お前、赤ん坊か？さもなくてこの世界の者でないか」
テアーリ

へっ？今、この世界とテアーリってのが二重奏になって聞こえたぞ。——ってことは、「この世界」イコール「テアーリ」っていうもの、な訳？……私の感覚じゃ「この世界」っていうのは……えーっつ。

「ちよっと待った！ここっでもしかして地球ですらないわけー？！」

三、松浦里菜っていうただの女の子が

結局、王様と御対面することになった私は、その番人らしい男に、両手首を合わせて縛られ、体と両腕もまとめて縛られ……つまりやたらと嚴重に縄でぐるぐる巻きにされた。おまけにお札らしきものまで首からかけられた。——どうやら、私が魔力でも使って逃げるんじゃないか、と思っっているらしい。

それでやつと檻と部屋から出してもらえた。（そうしたら部屋の木製の扉にもお札がかかっていた……）出たところで更に目隠しをされ、階段をのぼらされて通路をやたらと歩きまわられたあと、やつと止まって目隠しを取られた。と、そこは両開きの扉の前だった。

男が叫んだ。

「日本という国の松浦里菜だと主張するものを連行して参りました！」

木製の、いかにも重そうな扉がこちら側に向かって、ぎぎぎっと開く。

見ると、扉一枚ずつに緑髪の兵士（らしき人）が一人ずつついてそれを押していた。うーむ、こういうのもドアボーイというのかな。中に入る、というより入れられると、そこは広い部屋で、奥の方が薄いカーテンで仕切ってあった。カーテンは天井から床まで、壁から壁まで、余す所なく張られていて、その向こうは全然見通せないんだけど、影は見える。どでかい椅子らしきものと、それに坐っている男がでんとシルエットを作り、その脇に並サイズの椅子の影もある。

こんなことを見ているうちに、その番人に押されて、カーテンから五メートル位のところで止まらされた。えーと、気分としては正座でもしたいトコなんだけど、そういう習慣なさそうだしなー。妙なことすると、何でも魔扱いされそうだし。ここは一つ、向こうの

言うところに見てみましようか。

——ふと気付くと、右手の壁際にカーテンから頭だけ出して、じっとこっちを見てる青い髪の男の子がいた。小学：六年生くらいかな？なかなかかわいい子だなあ、うん。

あんまり興味ありげにこっちを見てるんで、思わずテレで、ひきつり笑いをしてしまった……。そしたら向こうも少しにこっとして、カーテンの中に顔を引っ込めてしまった。そして、トトトツと走って行って並サイズの椅子に腰掛けると、どでかい椅子に坐っている男と、一言二言言葉を交わした。

えーと、私は王様に御対面しに来たんだから、その男はロッフ王なんだろうな。その隣に坐ってるんだから、あの男の子が、私がその前に現われたって言う王子様なのかな。

そんなことを考えていると、その、多分王だろうと思われる人が口を開いた。

「御苦労。下がってよろしい」

私の隣の男は一敬礼して、まわれ右をして歩いて行った。そしてドアがギギッと音をたてた。——きつとまたドアボーイがドアを押しているんだろう。さらに少しすると、ドアは再び閉じたようで、足音は完全に消えた。

うーん、置いてかれてしまった。友好関係にあるとはとても言えない相手だけど、唯一会話をした人間だからなー、いなくなると心細い。うーん、一体どうしたら良いんだろう……。

悩んでいたら、カーテン（多分、御簾と似たような働きをしてるんだろう。偉い人とそれ以外を隔てる、という……）の向こうの男が言った。

「——わしがロッフ王だ」と。

うーんやっぱりこの男が王だったか。顔を見ると死ぬとかいうロッフ王ね。案外、余程のぶ男で、顔を見られると怒り狂って相手を殺すんだったりしてね。ははは。まあ、それにしても王子様らしい

子は可愛かったけど。

「魔よ、私の名において答えろ。お前の目的は？」

「王？陛下って呼ぶべきなのかな……ま、いいや。ロッフ王、その前に私が訊きたい。何だって私が魔だと言うんですか？」

「王子の（と隣の子の方を少し見て）目の前に突然出現するなんて芸当が、魔以外の何に出来る？」

「——一つお訊きますが、この国ってテレポートとかワープとかっていう概念ありますか？」

「てれぽおと？何だ、それは」

「私の世界で言われてる、二空間の物体を交換させる能力ですが。瞬間に移動できるっていう便利な力です」

「——その力をお前が持っている？」

「いえ別に」

「……」

「ただ、突然現われたからといって魔とは限らない、と」

「はん。どっちにしろ、そんなことが出来るのは魔だろうに」

「まあ、エスパーが魔女と言われるってパターンは小説とかによくあるけど、でも……」

「私は、そんな講義を聴くためにお前を呼んだのではない！お前は素直に正体と目的を吐けばいいのだ！！」

「だから私は松浦里菜っていう者で！いつの間にかここに来てたんだから、そもそも目的なんか持ちようがないでしょ！！」

「日本？ふん、そんな国がどこにあるというのだ？」

「そんなこと言ったって、在るんだから仕方ないでしょ！大体聞いた限りじゃ日本でないのみならず、地球ですらないみたいだから、ほかの惑星上に知らない国の一つや二つあっても当然でしょうがっ」

うーん、そうなんだよなー。ここが地球じゃないなんて、信じがたいんだけど、あの番人「ちきゅう？何だそれは」つつつたんだよねー。地球って単語だけ翻訳機が変換しないなんてこともないだろうしなあ。それにこの国の人ってみんな髪の毛青とか緑みたいなん

だよ。知ってる限りじゃ地球上にはそういう髪が普通のところってない筈だし……。

そんなことを考えていたら、王はもっと打撃的なことを言った。「テアリ以外のどこに人が住めるというのだ！惑星^{ホシ}なんて、ただの小さい石ころではないか！」

お、思わず頭痛が……。手を額にやると、あの可愛い王子様が心配して訊いてくれた。

「あのお、大丈夫ですか？」

「ん。ちよつと、この国の文化程度がわからなくて、くらつときただけ」

と、私は答えた。本当だよ、全く。何だって同時言語翻訳機なんて便利な物がある国で、星が石だなんて思われているわけ？よっぽど天文学だけ発展が遅れてるのかな。あ、でも服装とか建物とかを見ても文化程度低そうだしな。……んじゃこの翻訳機は何なんだ。

「トーレ王子。そんな者を心配することはない。それは魔なのだ。」

——もつとも、魔と通じたかどで投獄されたければ別だが」

トーレ、と呼ばれたその王子は、口を閉じた。——何か変な親子……。

「さあ、魔よ、素直に目的を吐いてしまえ。どこの国に頼まれたのだ、イサジアカラーサか……それともハーレ、とか？」

王子の体が、びくつと震えた気がした。何だろう、気のせいかな。しばらく間をおいて、王が再び言った。

「いいかげんに何も知らないふりはよしたらどうだ？まだしらをきるつもりなら——顔を見せるぞ」

「見せたら何だっつうのよ」

「……」

「死ぬとか何とかあの番人が言ってたけどねっ、顔を見ると死ぬなんつったら、どっちかっていうとあんたの方が魔なんじゃないの！」

「そうだ」

王はあっさり言った。

「え…」

「私は魔だ。だから人は私を見ると死ぬのだ。——このトーレ以外は」

「何だ。じゃあんなに可愛いのにトーレ王子は魔なのか。残念だなあ」

「トーレは人間だ。憎らしいことに」

「へっ」

「トーレは人間だ。なのに私を見ても死なない。だから私の息子にしたのだ」

三、松浦里菜っていうただの女の子が（後書き）

思えば第1章辺りって高校生の頃書いたのです。うはあ。

四、プリチュ王になりたくないプリチュ王子トーレと

ガチャツと部屋の鍵が開いて中に入ったところで目隠しと体に巻き付いている縄を解いてもらえた。

ガチャガチャツと檻の錠を開けて、私を中に入れ、ガチャガチャツと錠を閉めたところで番人らしい男が言った。

「手を出せ」

それで檻の隙間から手を出して、両手首を縛っていた縄を切ってもらった。

うー、縄が結構きつかったからな、痕になってる。痛いったら……。…。

番人らしい男は、部屋から出て鍵を閉めると、そこで番をしてるらしかった。

——どうやら本当に番人になったな。

結局、話が進展しないので、私を連れていった男がもう一度呼び出されて、私をここに戻したってわけなんだけど……。

うーん一体どういうことなんだろう??? 私がどうして他の星にいるんだろう、って事じゃなくてね。私のことは考えたってきつとわからないだろうから、とりあえず置いといて、あの王子様と王様の事。

どーも台詞から言うと、あの王子は養子みたいなんだけど、かわいくて養子にしたわけじゃなさそうだしなー。憎らしいって言うってたもんね。憎らしくて養子にするっていうのは、一体どういうことなんだろう？

うっうっうっ元の疑問符に戻ってしまった……。この世界の知識がないから考えにくいのかなあ……。

——と。外で足音がしたような気がした。耳を澄ますと——確かに。

それから、番人がその新参者と何か議論を始めたようだった。小

声で話してるんだけど、たまーに番人の興奮した声が聞こえてくるんだよね。「しかし!」とか「ですが!」とか。

しばらくすると声はおさまって、部屋の鍵を開ける音がした。

どうやら新参者は私に会いにきたらしい。誰だろう。今の状況を多少なりとも変化させてくれる人だと有難いなー。

すると、番人の「どうぞ」の声の後に入ってきたのは、トーレ王子だった。

「トーレ王子?!」

叫ぶと、ずっと番人が入ってきて、檻の隙間から剣を持った右腕を入れて、刃を私に向けて、言った。

「大声を出すな。トーレ王子はお前との会談を望まれている。――だが、王子をどうにかしてみろ、俺のこの剣が黙っちゃいないからな!」

何かこう、時代劇あたりで聞きそうな台詞だな。――まあ口答えをしてみる。

「どうにかたって、檻ごしでどうしろっていうのよ」

「――魔であるお前なら、檻をものともせず何かをするかもしれないだろう」

「――檻をものともせず何とか出来るなら、剣つきつけてるお宅なんで、とっくの昔にどうにかなってると思わない?」

「……」

王子がくすくすつと笑って言った。

「もういいよ、ムルー。どう考えてもあちらが正しいよ。――大体、僕にはお前や王の言うように、この人が魔だとは思えないけど? ね、松浦里菜さん?」

やあつと私のことを魔扱いしない人が現われたので、当然私の態度もやわらかくなる。

「里菜でいいです、王子様」

「そうですか? じゃ、僕のことともトーレって呼んで下さい」

「でも、トーレだなんて呼ぶと、許してくれなさそうな人がそこに

いるけど？」

と私は言った。

「構わないよね、ムルー？」

「……王子の御命令とあらば」

ムルーという名らしい、その番人は、しぶしぶそう答え、王子が剣をちらっと見ると、しぶしぶそれをしまった。

王子は続けて言った。

「それに僕は、貴女に仲間になって欲しいんだし」

「仲間？何の？」

「――この国を脱出する、です」

「脱出？！　たって、あなたこの国の王子なんでしょう？　だったら何で逃げる必要が……。あ、それにその前に――」

と私はムルーを見て言った。

「この人、あなたにすごく忠実に仕えてるみたいだけど、その前にあの王に仕えてるんでしょ？　そういう話して大丈夫？」

「大丈夫じゃなきゃする訳ないだろ」

うっムルーに逆襲されてしまった。そりゃそのとおりなんだけど……。

「大丈夫なんです。表向きはムルーは王に仕える身として、僕に仕えている訳なんです、実際は王に仕える以前に僕に仕えてるんです」

「ん？？？」

どういう事だ？

「ま、ちゃんと説明しますよ。どうやら本当にこの事ご存じないみたいですね」

それで、やっと私は、ここの知識を多少なりとも得られることになった。

「僕と王が本当の親子じゃないのはもうお気づきでしょう？」

「ん、まあおぼろには」

「僕はもともと、隣国の、ハーレ王国の王子なんです。――七年前

に、ここプリチュ王国のロッフ王が突然戦争を仕掛けてくるまでは。何分、ハーレは小国でしたので、大国プリチュの突然の攻撃に耐えられるわけもなく、そのうえプリチュは魔王ロッフを迎えたばかりで勢いにのってましたので、ハーレ王国はあっさりと敗退しました。そして――ハーレ王城にロッフ王がのりこんできました。

城の者は皆、王が来ると目をつぶるなり顔をそむけるなりして、死から逃れました。だけど僕は全然目をつぶらなくて――でもまるで何ともありませんでした。それでプリチュ王ロッフはハーレ王に向かつて言ったのです。

『ハーレ王、取引をしよう。もし、この王子を跡取りとしてくれるのなら、全ての者の命ばかりか、貴殿が王として存在することすら許そう。――勿論、毎年何かを納めてはもらうが』

と。要は植民地になれ、ということですが、それをのむ以外に国民を救う手立てはありませんでしたので、ハーレ王は目をつぶったままうなずきました。そしてロッフ王は、約束通り国民にも勿論王にも手を出さず、僕を連れて引き上げました」

ううむ……。何てゆーか……えっとお……。

「――僕の身柄と引き替えに国が助かった、と言えば聞こえはいい。けど実際にはそれは、いくらハーレの国力が充実しても、僕という人質がいるために、ハーレ王国は植民国としての生活を余儀なくされている、ということですよ。……そんなことには耐えられない！」

子供にしてはやけに淡々と、他人事のように話していた王子は、そこで初めて押さえていた感情を爆発させたようだった。

私の入っている檻につかまって、ひざをつき、うずくまるようにして泣いている――。

ムルーは、泣いている王子をどうしたらいいかわからないようだった。私にもわからない。でも――。

「――ハーレ王国の国力は、この国、プリチュとやらを打ち倒せるほどアップしてるの？」

と言ったら、トーレは顔を上げて答えた。

「はい！ハーレのみんなはプリチュに税を取られてもめげずに働き、貯えはかえって七年前よりも多いですし、戦力も——これは、七年前さっさと敗退した為に、ほとんど無傷だったことが幸いしたんですが——かなりアップしてるのとことですから、僕という要因さえなければ必ず勝てます！！いざとなれば、この命を土に還してでも……！」

ふう。七年前、魔王一人のために国をあけ渡した人々が、いくら戦力アップしたからといっても、勝てるのかなあとは思っただけ……黙っていると、実際に自害でもしそうな勢いだもんな。ここはひとつ……。

「わかった」

「えっ」

「やってみよ。このこと、全然わからないし、何故お宅が私を仲間を選んだのかも全然わかんないけど」

「あ、それは、あなた色々な事知ってるみたいだったから、絶対この脱出行の力になってくれると思ったし、悪い人じゃないと一目見た時から思ってたし、大体、僕の目の前に現われたんだから、きつと運命の巡り合わせだと思ったし、——何より、いずれ死刑の身じや手伝ってくれざるを得ないでしょう？」

……何だって？

「死刑って……どーして?!」

「どーしてって、魔と言われた者の運命ですよ」

あー、ジャンヌⅡダルクなんかもそうだったな——。

「じゃ、どうして魔王は死んでないわけ？」

「だって——死刑を決定するのは王ですよ。魔王に誰が死刑を宣告するんです？」

「……」

ううん、それは難しい問題だ。

「とにかく、なるべく早く実行に移したいんで、計画をたてないと

……」

王子がそう言いかけたらムルーが口を出した。

「王子！そろそろ帰られないと、王が……」

「あ、そうだね。じゃ、里菜、また来ます。あっと、ムルー。里菜にこのこと教えてあげてよ。頼んだよ」

そして、王子は走り去った。

——しばしの沈黙の後、ムルーがいよいよという感じで口を開いた。

「——何か聞きたいこと、は？」

「え、そりゃ山程。——でも、そうだな、最初に訊いところかな。

……ムルー、ハーレ王国がプリチュ王国に勝てると思う？」

そんなことを訊くとは思っていなかったらしく、少々驚いたような顔で、ムルーは私の目を見た。で、私は言った。

「正直なところをさ、言つてよね」

「そう、だな。——本心で言うとな勝てない、と思う。……国力が増そうと戦力が増そうと。七年前ハーレが勝てなかったのは、そのせいじゃない。——敵の前で王自ら目をつぶってしまうような国が、どうして勝てるというんだ？……そう、一番の敗因は精神力だ。そしてそれは七年やそこらで身につくものじゃない」

はあ、やっぱりムルーもそう思ってたか。王子がハーレの国力について熱弁してた時、王子の後ろでなんか渋い顔してたから、おや？と思ってたんだよね。

「——私もそう思う。でも『自分さえいなければ』なんて思ってる王子見てると、たとえまた負けるとしても、いっしょに脱出したいと思っちゃうな。——わけのわかんないうちにわけのわかんないところで殺されるのもやだしね」

ムルーは、唇のはしを少しゆがめた程度の笑みを浮かべて、そして言った。

「しよっぱなっから思ってたんだが、お前は外見も中身も何か変わった奴だな。——まあ最初は魔だからだろうと思ってたんだが……」

中でも気の強さは……凄いな」

凄いつて言われると、一体どう答えたものやら。

「えーと、まあそのー……。うん、気の強さには自信あるんだ、私」
何たって昔、痴漢さんにすら気が強いなーと感嘆(?)された程
の人間ですからね、私は。(何やったかっていうと、ただ、声出す
と殺すぞって脅されて、首絞められかけたんで、反対にカッター出
して脅したってだけなんだけど……)

「けどな」

ムルーが言った。

「けど俺は思うんだ。もしかしたらってな。——五歳の時、無意
識に目を開けていて死ななかったトーレ王子は、十二歳の今、意識
して目を開けていても十分王と渡り合える。それだけの精神力の持
ち主がハーレ王国に戻ったら、多少なりともハーレの国民に影響を
与えるんじゃないか。そうしたら、もしかしたら……ってな」

ムルーの目は夢見る目だった。

五、地下牢・プリチュ王城・プリチュ王国を脱出すべく

トーレ王子にはとっても素直なムルーは王子の言いつけを守って、ちゃんと私の質問に、わかる範囲で答えてくれた。——もつとも私に対する態度が軟化したのは、私のことをどうやら魔じゃないらしいと思いなおしたせいもあるようだった。

とにかくそのお陰で、翌日トーレ王子がまたもやこっそり降りてきた時、何とか幼稚園児程度にはこの世界のことを知っていた。(でもこの世界には幼稚園ってなさそうだけどね)

「里菜、どうですか？ 快適、の訳ないだろうけど、元気ですか？」

「うん、まあね」

さすがに昨日一日御飯ぬいたら、お腹がとーってもすいたんで、食事に出されるやけに固いパンを、一生懸命噛んで水で流し込んだ。——味も素っ気もない食事の仕方だけど、とりあえずエネルギー源も取ったから、元気！

——まあ、実を言うとき、おトイレずっと我慢してたら、今日の夕方頃おなか痛くなっちゃったんだけど、もうどうしようもない！ って時に仕方なくムルーに聞いたら、端の石が一つ外れるようになっていて、そこに排泄するものなんだ、ということがわかって、ムルーにしばらく部屋の外に行ってもらって、事は解決した。ははは……。

「じゃあ今日から脱走計画たてに入っていていいですか？」

「どうぞ」

「じゃ、何か案ありますか？」

思わず絶句。

「案あるかって、だって私よりあなた達の方が内情に詳しいでしようが！」

「——貴女が来る前にも、色々二人で考えたんです。でも全部ダメ。

この城は水も漏らさぬ警備網が引かれているので。だからここは、テレポートなどという奇想天外なことを知っている貴女に……」

奇想天外だったって、テレポートなんて既に一般的な言葉だもんな、地球では。――語だけはね。

うーん、しかし逃げ方ねえうーん……。私が思い付くような事、色々考えたっていう王子達が気付いてない筈はない、と思うけど、とりあえず思い付いたことを片っ端から言ってみようかな。

「えーとね、さっきムルー、あのお手洗いの下水、海に流してるって言ったよね」

「ああ」

「んじゃこの城って海に近いんだ」

「ごく近いです。えっと、海に面して崖があって、その崖の上にこの城が立ってるんです。で、この地下牢は、その崖の中にあるわけです」

王子が答えてくれた位置関係を頭の中に思い描いてみる。

「そうするとなると……崖の方も警戒は厳しい？」

「いや、全然」

ガクッ。余りにあっけないムルーの答えに体の力がぬけたぞ。

「じゃあさ、ちょっと危ないかもしれないけど、崖っ淵を縄でも垂らして降りて、海から逃げたら？」

おおっと。問題外の意見だったのかな？言うや否や、何を馬鹿なことを目で見られた。実際、

「何を馬鹿なことを」

とムルーに言われた。

「え、何。ひょっとして海に鯨でもいるとか？」

思わず尋ねたら尋ね返された。

「さめって何だ？――そうか、そう言えば国は大ざっぱに説明したけど、流浪の民は説明してなかったな。国は覚えてるか？」

うーん、本当に大ざっぱな説明だったからなー、ほとんど覚えてないけど、えーと……。

「えっと確か、大国が三つでプリチュ、イサジア、ラーサ。小国がハーレにオルファに……」

「クラブにサウニア、ウッディーラハサ、ロスエン、カランタ、エシャム、ボーグディアグ、で九つです」

と、王子が助け船を出してくれた。

「おーすごい！よく覚えてるねー」

私も地球上の国なら十二位言えると思うけどね。えっと、日本、アメリカ、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、イタリア、スペイン……。

確か、私はトーレ王子を誉めたんだけど、何故かムルーが得意だった。

「当たり前だ。何せ、俺が八年も仕えてる王子なんだぞ」

そうか。そうだっけね、ムルーは。――何が、そうか、というと、これも『表向きはムルーは王に仕える身として、僕に仕えている訳なんです、実際は王に仕える以前に僕に仕えてるんです』という台詞がわからなくて、昨日ムルーに聞いたことの一つ。

元々ムルーは腕の良い傭兵で、戦争とか盗賊退治とかいう段になると高額で働いてたんだって。ところが八年前、世界中が一時の平和状態にあって、ムルーが（どうするか…）などと考えながら旅をしていて、ハーレ王国の近くに差し掛かった時――。



その辺は、一帯草原だった。歩いているとキャーキャーワイワイと騒いでいる一群の人間がいた。服装やら持ち物、馬車から見て、貴族が遠出をしてきたようだった。

（ふん！貴族か）

俺がそう思って通り過ぎようとした時、風が吹いて、布が飛んできた。それは、その一行の中で唯一の子供で、故に大人達が食事の支度をするのを手伝えず、一人でぼつんと座っていた男の子の、日

よけの布だった。

俺がそれを拾うと、その男の子は走ってきて、言った。

「おじちゃん！ありがとう！」

貴族の子が、大人達が誰も気付かなかったとはいえ、自ら取りにきたのが印象的だった。

貴族の子が、見るからにただの旅人とわかる俺に、礼を言ったのが印象的だった。

そして何より、人を真っ直ぐに見る澄んだ綺麗な碧い瞳が印象的だった。

俺は、思わずしゃがみこんで訊いた。

「ぼうや、名前は？」

「トーレ、だよ！おじちゃんは？」

訊き返されるとは思ってなかったので、俺は少々戸惑いながら答ええた。

「ムルーだ」

丁度その時、やっとその子がいけないのに気付いたらしく、大人――つまり下女の一人が声をあげた。

「王子様！どちらですか？」

そこは馬車の陰になっていて、下女の側からは見えなかった。

「はい！今行くよ！」

その子は返事をし、

「ムルーおじちゃん！またね！！」

と言って、日よけの布を頭にかぶって走って行った。

またね、というのが印象的だった。

それに、ただの貴族の子でなく、王子だったということが、先程の印象を深めたのは当然だろう。

俺は、瞬時にその子に仕えることに決めた。

その場所と、王子の年とから考えて、ハーレの王子だと確信できたので、俺はハーレ王国に向かって歩き始めた。

つねづね俺は、そろそろ世界は統一されなくてはダメだ、と思っ

ていた。こんなに争い事ばかりしては、どの国も自滅してしまう、と。――まあ戦いがなくては生きていけない傭兵の台詞じゃない、とは思ったが、ね。

俺は、それまでけっこう色々な王に会ってきたが、どの王も世界を統一するに足る人物とは思えなかった。だが、この王子は、育ったらそれらのどの王とも違う王になる！と思った。そしてその成長の過程をこの目で見てみたい、とも。

二時間も歩くと、ぼちぼちハーレ王国に属する村落があちこちに見えてきた。どの村にも寄らず、更に四時間程歩くと、ハーレ市を囲む石壁の、西大門に出た。

当然番兵にとどめられ、俺は推薦状を見せた。《里菜注。推薦状というのは、契約状態が終了した時、つまり争い事にケリがついた時に、契約した主（村長とか領主とか、王だったりするそうだ）がよく働いてくれた傭兵に対し、報酬とともに渡すもの、らしい。それをもらった傭兵は別の所へ行く時、それを見せて腕と忠義とを信用してもらい、雇ってもらう、というわけ。その男がスパイだったりすると、推薦した者が睨まれるから、滅多な人はもらえないとか。その、もうのが難しい推薦状をムルーは十一も持っているらしい》番兵は早馬を駆って城の王に取り次いでくれ、俺は城下を一時間ほど歩いて、そして城で王と会った。

王は言った。

「傭兵ムルー、だな？ 推薦状の文句を見るまでもなく、お前の噂は聞いていた。――若いのに大層な腕の剣の使い手だと。が、一体何用だ？ 知っているとは思うが、我が国は現在どことも闘争状態にはないし、しばらくは戦争になりそうな気配もない。内紛もないし、今のところは盗賊の害もない。傭兵とは争いの中でのみ働く者であるろう？ 一体何用だ？」

もう知っての通り《とムルーは私に言った》この一年後にプリチュ王国との戦争、というか、プリチュ王国の侵略が始まったわけだが、その当時プリチュの王はまだロツフ王ではなく、そんな兆候は

微塵もなかった。

俺は王に向かって言った。

「ハーレ王、俺は傭兵をやめたいと思う。そしてこの国に仕えたい——というより、ここの王子に」



「ちょっと」

と私は言った。

「ムルーって王様に対してそーいう言葉遣いするのー？」

「当たり前だ。王と俺は対等な立場じゃないか。俺は俺の能力を売り、王がそれを買うつていう、な」

「……理屈は、わからなくも、ない、けどねえ……」

でも、能力を商売物、王をお客とするなら、「お客様は神様です」つていうんじゃないのかなあ……。

「砂漠を出て以来、心から仕えたい、と思ったのは、トーレ王子だけだ。王子以外の誰に敬語なんか使うものか！——もっともロツフ王は別だがね、心服してるふりをしてるから」



「それは——我が国にとっては有難いが、どういうことだ？ しかも王子の、とは？」

「別に。ここの王子が気に入っただけだ」

王はしばらく俺を見ていたが、割とあっさり言った。

「よかろう。但し、王子に仕えるとはいえ、一応表向きは我が国の兵になつてもらうぞ。でないと給料も払えないし、な」

「ああ、俺もそれは当然と思う。王子に仕えるということは、結局、この国に仕えるということだし……。だが俺の忠誠はあんたにやらんぞ」

王はにやつと笑って言った。

「わかった」

これは後で聞いた話だが、ハーレ王はそのあと、大臣に言われたんだそうだ。

「王、忠誠も誓わぬ者を城中にあげたりしては……」

と。王は答えて言ったそうだ。

「いいではないか。あの男は、今までどんな主にも忠誠を誓ったことがないそうだ。だが一度たりと主を裏切ったことはない。——忠誠を誓いながらも逃げだす傭兵、どころか兵士も多い昨今、ああいう男の方がかえって良いとは思わぬか？ あのはっきりした物言いも私は気に入ったが」

とね。——あの王は、今時珍しい、話のわかる権力者だったよ。

そして——次の日。俺は遠出から戻ってきた王子に引き合わされた。二人だけになった時、王子が俺に言った言葉が、また印象的だった。

「ね、またねって言ったでしょ、ムルー」

——俺は王子に絶対の忠誠を誓った。

そして、それからの一年で、俺はトーレ王子に仕えたのは本当に正しかった、と悟った。魔王にも対抗できるとは予想以上だった。

だが王子は魔王に連れ去られてしまった。

ハーレ王国は建て直しに取りかかったところだったが、俺はかまわず、誰にも断わらず、单身プリチュ王国に向かった。俺が一年間ハーレ王国の兵士だったことは、城内の一部の人間しか知らないことだったし、平和な時期に傭兵が一年位行方不明になるのはよくあることだから、特に不審にも思われず、プリチュ王国に入ることが出来た。

俺は、そろそろ安定した生活を送りたいから、と言い、プリチュ王に偽りの忠誠を誓って働き始め、——そしてやっと最近、王子の警護の仕事が入ってきたところだった。もっとも、お前が現われた時、丁度王子の護衛に俺がいて、俺がお前をここまで連れてきたせ

いでそのまま牢番をさせられることになって、王子の警護の仕事は消えちまったがな！



そう話をしめくくるとムルーはぷいっとそっぽを向いた……。あれがなかなかかわいくてねー。大体、最初やけにつっかかってきたのが、王子といえるのを邪魔された腹いせもあったんだと知ると……実に可愛い。二十八の男とはとても思えなかった。

その、二十八の男とは思えない奴が言った。

「――流浪の民とはつまり、そのどこの国にも属してない奴らだ」

「……ジプシーみたいなもんな……？」

「じぶしーというものは知らんが――つまりだな！」

ムルーが苛々してそうな声でそう言うと、トーレ王子が後を続けた。

「流浪の民というのは、定住地を持たず流離う人々のことですが、ただの流離人じゃなくて、民族の代表といえますか――そういったものもあります。その種類には、砂漠の民・アビリ、草原の民・プテス、湖の民・ミウミウ、山の民・トンム、海の民・ドニート、空の民・フィルアがあって、初めに言った二族以外はほとんど伝説上のものとはなっていますが、やはり彼らの及ぼす力は大了たものです」

「は？」

ちよつと頭が……。えつと……。あ。

「民族の代表っていうのは？」

「えーと……国などが生まれる前から人間は世界中にいたわけで、その時代の居住地域とかで、肌とか髪の色とかが少しずつ違うんです」

「あ、地球の黒人とか白人とか黄色人種とかと同じ、かな」

「ええ、多分そうです。で、当時は全ての人々が流浪生活をしてい

たんですが、少しずつ定住していき、国を作り……残った未だに定住していない人々が、流浪の民、と呼ばれています。彼らは全く他の民族と交わっていない、純粋な血を持っているので民族の代表と言えます」

「はあ、人種のモデルケースってわけか。——そう言えば私も黄色人種・大和民族のモデルケースだけだ。」

「ちなみに僕は、いわれでは全部の民の血をひいているそうです。でもまあ、大体はハーレ国民もプリチュ国民も草原の民＞プテス＜の出ですね。ムルーは……砂漠の民＞アビリ＜だっけ？」

「はい、そうです」

「——こんな説明で、大体わかります？」

「ん——一応ね。で、その流浪の民がどうかしたわけ？」

「海には海^{ドリート}の民がいる」とムルーが言った。

「えーと、ほとんど伝説と化している民族だよ、それが？」

「海に関することは、彼らと契約しなくちゃいけないんだよ！」

「……伝説上の民族と？」

「及ぼす力は絶大、と言ったでしょう。実体はこのところ認められませんが、力が活動しているのは確かなんです」

——どこに確信持ってるのか知らないけど、古代でよく見られる訳のわからない信仰じゃないのかな。実を言くと私は、あの王が魔法だというのにも疑問を持っている。だって誰かがあの人を見て死んだのをこの目で見たわけじゃないもんね。——といっても、私、現実主義者なわけじゃないんだけどね。だって別に無神論者じゃないし、あんまり関係ないような気もするけど、神話とか大好きだし。ま、とりあえず……。

「あのさ」

ちよつと芝居がかって、牢ごしに二人にずいっと近付いてぼそつと言った。

「魔王と海の民とどっちが怖い？」

五、地下牢・プリチュ王城・プリチュ王国を脱出すべく（後書き）

ちなみに3大国の名前は、花の名前がもたっています。

プリチュとイサジアはひっくり返すとわかります。が。ラーサだけは何の花をどうやってこういう名前になったのかさっぱり覚えていません……。

六、脱走計画を考えた。

魔王と海の民とどっちが怖い？——私がそう言うってから、しばらく経っていた。だのにまだ二人とも、

「うーん」

と考え込んでいた。だから私は言った。

「つまりさ、現実的に見てどっちの方が危険かってことだよ？急いで逃げないといけないんだし、他に逃げ道が見つからないんなら……」

「別に急がなくてもいいんだぞ、我々は。ただお前が死刑にされるっただけだ」

とムルーが、以前ならマジで言っただろうけど、今はからかって、言った。で、私も言い返した。

「おーや。そう長期間、脱走計画を練っているのを魔王に隠しおおせるとは思えないけどねー」

「……」

やーい、黙り込ませてやったぞ！

そして王子が、静かに言った。

「……里菜の言う通り、そう長く隠しおおせるものではないでしょうね。それに僕は急いで逃げたい。急がないと……」

ん？急がないと、何なんだろう、と思ったんだけど、王子はそのまま台詞を跡切らせ、次に口を開けた時には、

「——海をとりましょう」

と言った。

ゴクッ。ムルーがつばをのみこんだ。

「ただ問題は——ハーレ城市もプリチュ城市も海の民と契約なかったから、僕泳いだことないんですよね」

うっ★——私もあんまり泳げないしなあ、うーん……。えつまさかっ

「ム、ムルーは?!まさかムルーも……」

「俺は泳げる。前に海の民と契約のある街に雇われたからな」
ほっ。よ、よかったぁ……。

「ムルーが泳げるなら、泳ぐの手伝ってもらえるし、人間の体は浮くようになってるそうだから、大丈夫でしょ。」

それよりどっちかっていうとずっと問題なのは……何処から海に出るかとか、崖の高さとか、岸までの距離とか……」

「あ、前々から脱走計画のために書庫から城の設計図とか手に入れておいたので……」

そう言ってトーレ王子は懷から古そうな紙を取り出した。その紙は数枚束ねてあって、色んな方向から見た城の絵らしきものとか、城の断面図らしきものとか、平面図らしきものとか色々あった。

とりあえず全部に目を通したけど、

「わかるか?」

というムルーの問いに思わず、

「わからん」

と答えてしまった。

「図はわかるけど、書き込まれてることがわかんないよお」

で、かなりの時間をかけて王子とムルーに一々訊いて、位置関係とかをざっと理解した。

えっと、そうすると、崖から海に出るためには、なるべく見つからないように地上に上がり、一階の窓から縄を垂らして崖を降りていけないといけないわけか。うーん、この崖、かなりありそうだなあ……。

「ムルー、この崖って高さどのくらい?」

「えーと10テイってとこかな」

「……1テイってどれ位なわけ?」

「ああ……俺の肩ぐらいだ」

「ムルー起立!」

と言ってムルーを立たせ、私も立つ。

「えと、ムルーの肩は私の目くらいだから、大体150センチメートルか。ってことは10テイは15メートル……」

うーん、校舎の一階分が4メートルぐらいと考えると、大体四階分ってことか。――うちの学校の四階建て校舎の屋上って立入禁止になってたよな。立入禁止になるくらいの高さ、ね……。

別に高所恐怖症ではないけれど、その高さを縄だけを頼りに降りていくのかと思ったら、少し寒気がして、思わずこわごと崖側から見た城の絵を眺めてしまった。

あ、あれ？――絵に、さっきは気付かなかったものを発見した。

「王子、この黒いの何？」

崖の途中に一つ、小さい黒い長方形があるんだよね。

「ああ、それは窓です。――地下牢に続く螺旋状の階段の途中で、外とすごく近い所があって、その岩をくりぬいて窓にしてあるんです」

うーん、ちょっと苦しい説明だけど、何となくわかった。

「あ、そうか！あの窓から出られないかな？」

王子が声をあげた。

うん、成程。地下を現在管理してるのはムルーらしいから、地下から直接海に出れるなら、その分見つかる可能性は大幅減るんだ。

「ああ、あの窓なら――充分人一人通り抜けられますね」

ムルーが、少し考えながらそう答えた。

「じゃ、そこから、でいい？」

と私が訊くと二人ともうなずいたので、もう一度質問した。

「で、この窓からだ海面までどのくらい？」

「うーん、今頃だと、大潮時だし……満潮時で3テイってとこかな」とムルー。3テイは4・5メートルだから、うん。低くなった。良かった良かった。

「それで城は出れるとして、そこから――んと川ぐらいまでは泳いでいった方がいいのかな？」

「そうですね、そのくらい泳いだ方が城の見張りに見つからないで

すね」

と王子。

「じゃ、その距離は？」

「えーと、100テイ、かな」

ムルーの言葉に、私は唸った。

「げー、150メートル？私そんなに泳げるのかなあ……」

今までの最高が確か50メートルだよな。

「足をつける所と違ってないの？」

「多分、ないだろうな」

「うーん。ま、死ぬ気でやりや何とかなるでしょう……。王子は？」

「頑張る」

「OK。じゃとりあえず河口に着いたでしょ。そこからは、大丈夫？」

「河口付近の崖を――ま、2テイぐらいだから楽勝だけどな――よ
じのぼって、後は陸路になるわけだが……やってみるしかないだろ
うな」

「じゃそっちの道の方はまかせるね。後は準備、か……」

「何が要りますか？必要なものはなるべく僕が集めときます」

「ん。まずね、縄はいるでしょ。登ったり降りたりするのに。あと
服ね。多少なりとも変装しないとイケないし、私の格好じゃ目立つ
でしょ」

何てったってパジャマだもんね。

「そういや、前から思ってたんだが、随分面白い服だな、お前が着
てるの。大体やたらと細かく縫ってないか？」

そりゃミシン仕事だもんねえ……。

「でもこれ寝間着だよ。普段着るのは、ここの感覚からすれば、き
つともっと面白い……」

しばらく、珍しそうに私のパジャマを眺めていた王子が口を開い
た。

「えーと。それじゃ旅人の服を三人分用意します。あと、資金とか

食料とか要りますね。他には？」

「んー、あ、そうだ。この人ってみんな髪青いの？黒って珍しい？」

「ああ、緑の人とか紫の人とかいますけど、里菜のような真っ黒の髪の人っていませんね。……ちよつと普通では考えられない髪の色ですよ」

「んなこと言われてもねえ……」

「何とか隠す方法ない？かつらとか染めるとかターバンとか……」

「旅人の中には髪を全部布でくるむようにしている人がいますからね。布を用意しておきます」

「ありがと」

「あー良かった。」

「となると、そういうものなるべく濡らさず持ち出したいね。この翻訳機だって濡らさない方がいいだろうし……。着替えの服もね。濡れた服なんて着て歩くと不審の元だし風邪の元。何か水を通さない袋みたいなのない？」

「――ああ！皮で作った水袋があります。それで平気ですか？」

「うん、上等。服とかが全部入るくらい用意してね。それでその口をしっかりと閉めて持って――綱をつたって海に降りて、泳ぎまくって川。着替えて――で、ハーレ王国まで歩き？」

「それ以外、ないだろう。海から脱出じゃ馬を盗んでいくわけにもいかんし……」

「ムルーがぶつぶつ言った。」

「歩いて何日ぐらい？」

「えーと、八日ってとこかな。隠れながら進まなきゃならないし……」

「……食料が大変だね。途中で補給できる？」

「収穫前だからな、ほとんど望めないだろう。ま、水さえあれば死にやしないし、水は各村の井戸からでも汲めばいいし」

私の問いに対してムルーが答えてくれて、それから王子が言った。

「幸い今年はよく雨が降って、井戸も涸れてないだろうしね。――と、僕そろそろ戻ります。決行は、いつにします？」

うーん、私達がいらないことをなるべく長時間悟られない方がいいんだよね。私とムルーは食事持った人が一日二回下りてくるだけだから……。

「王子が一番長い時間一人でいられるのって夜？」

「あ、そうですね。九時から朝の七時まで十時間」

ここは地球と同じく一日が二十四時間なんだそうさ。

「で、必要な物、何日ぐらいで集まる？」

「余裕を見ても――明後日中には必ず」

「じゃ明後日の夜九時決行ということにしよう。いい？」

「はい！」

と、明るく王子。

「ああ」

と、暗くムルー。

「それじゃまた明日！」

と言って帰ろうとした王子を、私は呼び止めた。

「あ、明日は来ない方がいいんじゃない？ あんまり来ると、来るのばれやすいでしょ」

「――そーですね。じゃ明後日に！」

と言って王子は立ち去った。

ムルーは、内側から部屋に鍵をかけると壁際に坐り込んだ。

「うーん、計画洩れ、ないかなー」

「多分な。不安といえば海の民のことだけで」

しばしの沈黙。そして私が口を開いた。

「ねームルー。海の民との契約って、つまりどんなことをするの？」

「……人身御供だ。向こうの提示した条件に見合う人間を」

「ふうん」

条件をだすってことは人肉を食べてるわけでもなさそうだし……
一体何をしてるんだろう？

「――そういえば、昨日から訊こう訊こうと思ってて訊けなかったんだけど」

「なんだ？王子の御命令だから、俺は何でも答えてやるぞ。さっさと言やあいだろ」

「……だってさー、ここの文化程度ってどのくらい？って訊いたってわからないでしょ」

「――そりゃまそうだな。俺にしてみりゃここの文化程度は普通、だもんな」

そーだよ。基準が元々違うんだから。

「ただ、服なんかっから見て、私の国の方が文化程度高そうでしょ」

「――ああ」

「なのに何で翻訳機なんて高尚なものがあるわけ？」

「ああ、そりゃ〈先人の落とし物〉だからな」

「……なにそれ」

「つまりだな、昔この世界にはひじょーに頭の良い方々がいて、色々わけのわからん絡繰り仕掛けを残して、どこかに消えてしまったと。この翻訳機という代物はだな、その中で使い道のわかっている少々のもののうちの一つだったわけだ」

ふうん。じゃこは昔、遥かに高度な文明が栄えていたわけか。

「そーいう絡繰り仕掛けはわけがわからんで、今じゃ各国王城で保管されてる筈だ」

「へー面白そー」

見てみたいなー。

「――ここを見るのはあきらめとけ。一応こないだ翻訳機を取りに行った時、王から保管室の鍵を預かったままだが、お前が歩くのは危険だからな」

「……はあい……」

くすん。残念だ。

「ま、ハーレ王国のをきつと見せてもらえるだろうし」

ムルーは多分、慰めてくれたんだろうけど、私は思わず暗くなる

ようなことを言ってしまった。

「無事に着ければね」

「……」

それっきりムルーも私も口を開かず、壁の所に立ててある松明（なんだろうな、多分あれが。実物なんて見たことないから……）が燃えている音が少しするだけで——ほんとに暗い雰囲気になってしまった……。

七、しかし、計画通りにいかないのが世の常というもの…

「うーん……あーよく寝た」

私はそう言つてむくつと起きた。何せ地下だからお日様とは無縁だし、時計はないし……で、まるつきり時間がわからない。

でも放つとくと十五、六時間は寝てる私がよく寝た、と思ったんだから、きつともう昼過ぎだろう。それにしても、いつどうなるかもわからない身で、石畳の上で布団もなくてよく眠れるものだ……我ながら感心する……。

「ムルー！おはよー！！」

言つてみたけど返事がない。ムルーは檻のある部屋の外で番してる筈で……そこにいる限り、聞こえてないってこともないと思うんだけど……。

おっと。足音だ。少し慌て気味の。

足音は私のいる部屋の前で止まり、次にはガチャガチャと鍵を開ける音。そして入ってきたのは……。

「ムルー！どーしてたの？いないから、心配しちゃった」

「ああ、俺も心配した。突然王から呼び出されたんでな。計画がばれたかと……」

言いながら檻の錠を外す。

「で結局、用件は何だったの？」

「お前を連れて来いだよ！——一応、また嚴重に縛るが……悪く思うなよ」

「うん勿論。怪しまれたら元も子もないもんね。だけど私に、一体何の用な訳？王は」

縛りながら、ムルーは言った。

「とりあえず脱走計画のことじゃないらしい……から、この間の続きじゃないか？」

「あの、魔がどうとやらつていう——？」

疲れるんだよね、あの問答は。

で、以前と同じく沢山歩いて、目隠しを取られて部屋に入ったら、今回は王子はいなくて、カーテンの奥で王が席に着いて待っていた。そしてムルーが退場し——王が口を開いた。

「魔よ。もう一度訊く。そしてこれが最後だ。——お前の目的は？」
こーなったら煙に巻いてやろう。

「現社会において、目的意識を持って動いている人間がどの位いるか、なんて知りませんが多分少ないんじゃないでしょうか。まあ、進学率九十八%の進学校の高校三年生としましては、とりあえず目的は大学合格というところなんでしょうけど、かといってとりたててやりたいことがあるわけでもなし……まー私は普通よりも目的意識のない高三生だと思いますが」

「……この翻訳機、壊れたのか？ 何だかわけのわからない言葉しか聞こえぬが……」

「壊れてませんよ、多分ね」

素直な私はそう言ってあげた。

「ということは——わけのわからないことを言って一体どうするつもりだ？ 何か事態が進展するとしても？」

「いーえ別に。遅れも進みもしないでしょうよ。でも別にわけのわからないことを言ったつもりありませんがね」

「……もう一度だけ言うぞ。目的は何だ？」

「おーや、さっきのが最後じゃなかったっけねー？」

「ふざけるのもいいかげんにするんだな」

「間違ったことは言ってますんよ。そーですな、でも真面目に言えというのなら……本心を言ってみましょうか」

で、思いつき息を吸い込む。どーせ本心を言うのなら、本心並の音量で。せーのお、

「んなもんじゃないって言ってるだろ！！このすかたん！！！」

あーあ。ばいばいと言っただけで叱る、うちのがっこの校長先生

が聞いたら、絶対怒り出す言葉遣いだな。

「――お前の本心はよくわかった。そしてお前の未来も決まった。

――処刑だ！明日の……正午に」

あした……？ま、まずい。せめてあさってにしよう！明日の夜逃げるから。

「いや、待てよ」

そ、そうそう。考え直そうねっ。

「お前は、私の顔を見ろという言葉を恐れなかったんだ……。興味がある。一度、私の顔を見せてみよう。万一生きていたら……お前はトーレを気に入ってるようだし……丁度良い。トーレの母親になるんだな」

母親……ははおや……ってことは、ええー冗談じゃない！十七才で十二才の子の母親になってたまりますか！――いや待てよ、論点がずれてる……そーだ、どーして好きでもない奴の奥さんにならなきゃあかんのだ！冗談じゃないっ！

……っていうのに……王はムルーを呼ぶと言った。

「明日の正午に私の寝室にそいつを連れて行け。――処刑になるかどうかは、まだわからぬが、な」

し、しんしつだ……。冗談ではない！というのだ！！

でもまだ明日で助かった……今日これから、じゃ、何の手も打てないところだった……。顔を見せること、すなわち処刑、になるかもしれないから、予定の時刻は変わらなかったのね……。

えーと、顔見せられても死なない自信はあるけど――だけど、どういう根拠で自分の顔（？）にあんなに自信持ってるのかね、あの王は。やっぱ過去の実績かしら。とするとやっぱり危ないかなあ……うーむ。

いいや！誰が死んでやるもんか！！しかし、死んでやらないにしたらってあんな奴の嫁さんになるのはごめんだ。とするとやっぱり……手を打つしかないだろうなあ……。

そんなことを、牢に至る道中考え続けて、で、牢に着いて目隠し

が外されるなり私はムルーに言った。

「ムルー！王子と連絡とって！全部揃わなくてもいいから、物を揃うだけ揃えてって」

「じゃあ……」

「私の都合で予定変更して悪いけど——今夜決行よっ」

七、しかし、計画通りにいかないのが世の常というもの…（後書き）

そういえば、一番最初、このサブタイトルは「しかして、……」でした。読んでくれた友人に「しかしてってそしてって意味だよ」と指摘されて、「しかし、……」になったのです。知りませんでした、「しかして」の意味。

八、とりあえず逃げ出した、のはいいけれど

夜。何時だかわからないけど、とにかく夜。私は階段の途中の窓の下にいた。

灯りといえば、窓からわずかに差し込んでくる月の光ばかりで、暗い。まあ、かなり目は慣れたけどね。

「王子、どうしたのかな。うー、一人でいると悪い想像ばかりしちゃってよくないわ……」

呟いた途端に螺旋階段の上から足音。そして王子が現われた。

「すみません、遅くなって。何しろ大荷物だから人目につかないよう持ってくるのが一苦労で……。あれ、ムルーは？」

と、サンタさんのように荷物を抱えた王子が言った。

「えっ会わなかった？私をここに連れて来て『ちよっと待ってろ』って言って行っちゃったから、てっきり王子を迎えに行っただとばかり……」

「いえ、会いませんでしたけど……。行き違ったのかな……。まあ何かあってもムルーなら大丈夫でしょうが……」

「そーお？じゃこの間に荷物点検しとこうか。揃った？」

「はい、大体」

で、広げてみると……大袋の中に中袋と小袋数枚。長い布も数枚、お金（だろう、多分）の入った袋、食料らしきものに入った袋、地図、服三着、綱……。

「――随分立派に集めてくれたね。時間もなかったのに。大変だったでしょう」

王子はにこっと笑って言った。

「それほどでも」

嘘だね、やっぱり大変だったと思うよ。それを口に出さないとなんか、十二才とは思えない偉い子だね。ムルーの誉め様もわかる気がする。

「あと適当に使えそうなもの持ってきました。松明とか火打ち石とか小型だけど弓矢とか短剣とか」

おー、よく気のつく子だ。それにしても――。

「ムルー遅いね」

「そーですね。あ、でも足音ですよ」

コツコツコツコツ。

「遅くなってすみません、王子」

ムルーは手に何やらごちゃごちゃ持っていた。

「どーしたのムルー。――何持ってる訳？」

王子の問いに、ムルーは

「ああ、どうせ行く先々で必要になると思って翻訳機を幾つか持ってきたんです。それと――」

と言ってから私の方を向いて、何だか色々なものを手渡してくれた。

「興味、ありそうだったろ。お前なら使い方わかるかもしれんと思つて、小さい物を適当に取ってきた」

えっわざわざ？翻訳機だって私のため、だよね、結局。

「有難う」

「いや、脱走に役立つ物もあるかと思つて――」

と、ムルーはそっぽを向いた。はは、照れてるのか。

えーと。――何か見覚えのある物が多いな。ライターでしょ懐中電灯でしょ腕時計でしょ。ありやこの時計ちゃんと動いてる。地球と同じく十二が上で三が右で……という見方でいいんだったら九時三十五分つてとこかな。――ちよつと、これ古代の物じゃなかったっけ。何だつて今まで動いてんのよ！

うーん、今の地球より高度な文明だったみたいだからなー、永久電池でも発明されてたんだろ。

それにしても、随分地球と似通った文明だったんだなあ。こんなに機器が似てるとは……。

えーと、こっちは――おっと。

「おい、見るのは後にしろ。早く行かないと」

「あ、ごめん」

私がさぼってる間に既に荷物が三つに分けられていた……。で、余っていた小袋の一つにムルーが持ってきた翻訳機その他を入れて、更にそれを私が持つ分の中袋の中に入れて――。

「あ、王子。王子の分の荷物、私が持つよ。貸して」

「え、どうして？」

「王子泳いだことないんでしょ。泳ぐことに専念した方がいいよ。私も泳ぎ自信ないけどとりあえずは泳げるから……」

「だったら俺が荷物を――」

「ムルーは王子を連れてってよ。助ける人がいれば、泳ぐのも大分楽なんじゃない？――浮き輪でもあればいいのにね……」

ま、無い物のことを言ってもしょうがない。

「使ってる翻訳機も袋の中に入れちゃおう」

という訳で、その後は会話が不可能になった。王子とムルーは何やら喋っていたけど、わかる筈もない。

そして無言で、脱走計画は開始された。

九、さて一体どうなることやら。

窓までの高さは――170センチくらいかな。手をかけられる高さだし、壁は結構でこぼがあるから何とか登れそう。窓は別に格子がある訳でもないし……。

ムルーに後ろから押してもらって、まず王子が登る。王子がまだ窓枠にいるうちにムルーが軽々と登る。

うーんさすがにあの窓枠に三人じゃ定員オーバーだな。誰かが向こう側に降り始めてから登ろう。

ドカツ。――何か物凄い音がしたけど、何やったんだろう……。しばらくして、ムルーの姿が見えなくなった。んじゃ登ろうかな。窓枠に手をかけて、壁のでこぼに足かけて、よいしょと。ふうー。

王子がにっこり笑いかけてくれた。

おっと。さっきの物音の正体がわかったぞ。ムルーが短剣をぐさつとさした音だ。刃の部分がほとんど埋まってる短剣が私のすぐ横にある……。馬鹿力だなあ……。

でもって、そのつかの部分に綱の端が結び付けられていて、その綱をつたって今、ムルーが降りているところ。

――この短剣の刃って丈夫なんだなあ……。ムルーの体重を支えられるなら、王子も私も大丈夫だろう。

それにしても。海面まで本当に4・5メートルなんだろうか。暗いせいもあるだろうけど、全然下が見えやしない。ムルーの姿も見えなくなってきた。

次に王子が用心深く降りていった。

うーん、4・5メートル……。そういや満潮時でって言ってたっけ。干潮時だともっとあるんだろうなあ……。

王子の姿が見えなくなってきた。じゃあそろそろ行こうかな。私は綱をしっかりと持って、壁に足をかけながら降りて行った。――

―滑り降りれば早いだろうけど、綱を持って滑り降りて、手のひらを火傷した人を知っている……。

ざぶん、ざぶん……と波の音が聞こえる。そういえば海に入るんだよね。日本の夏並の気温とはいえ、夜だし、水は冷たいだろうな。準備運動をしとくべきだった……。

ぼちゃ。あ、足が水にさわった。海だ。一気に綱から手を離すと――う、渦だ！うわー！荷物が！王子たちもやっぱり巻き込まれているんだろうな……冗談じゃない！苦しい！ごぼっぜっぜっごぼっ。と、声。

『お前たちは我々と契約していない。どこの者だ？一体誰だ？』

こ、こんな時にそんなことゆーちょーに訊かないでくれっ。あれっ私、翻訳機してないよね。何でわかるんだ？――あっこれ頭の中で聞こえてるんだ！じゃ、いわゆるテレパシー？

『どこの者だ？』

ああ海の民とかいう人、本当にいたんだね。ムルーの反対押し切って悪いことしてしまった……。

『ムルー？砂漠^{アベリ}の民の傭兵の、か？』

あら、ムルーって本当に有名なんだ。でもムルーは今は傭兵じゃないんだよー。今はねートーレ王子の……。

『待て』

あれ、今まで質問してた人と違う人みたい――。なんか、感じが違うような気が……。――あー、なんだか、もーろーと、して、きたな――。

『娘。お前――黒髪に黒い目、のようだが……松浦里菜か？』

え、何で私の名前知ってるの――？

『では、やはり松浦里菜なのだな？』

『おお！サオトムの言いし彼の人か？』

『そして全ての民の血をひくトーレ王子に、砂漠^{アベリ}の民の若長の乳母^{めの}子^こときては、助けぬ訳にはいくまい』

『それでは――』

そこで記憶が途切れてしまった。
多分、気絶したんだろう。

「里菜！大丈夫ですか？」

あー王子の声だ。テレパシーではないから、きっと翻訳機をはめてくれたんだろうなー。

「あっ里菜が目開けたよ、ムルー」

「王子？おはよー」

「おはようございます」

起き上がりながら訊いてみる。

「私達、助かったの？」

「ああ、どうやらな」

とムルーが言った。ムルーは枯枝を集めていた。

そこは海ではなく、森の中の、川の近くで、流された筈の荷物までちゃんとあった。

「どういうこと？」

「さあ。渦に巻き込まれて気絶して、気付いたらここだ。ということなのか、お前が知ってるのかと思ったが……」

「知らな……あ、でも海の民

ドニート

の会話らしいの聞いたなあ。サオトシムの言いし彼の人と、全ての民の血をひくトーレ王子に、砂漠アビリの民の若長の乳母子ときは助けぬ訳にはいくまい、っていうの」

めのとご、でムルーがびくつとしたようだった。

「……夢でも見たんじゃないか？」

「そうとも思えないけど。大体、ムルーあんたアビリの若長の乳母子ってのに心当たりありそうだねー」

「全くない！」

その、むきになるところが怪しい、というのさ。

「でも実際、ドニートのおかげ、とても思わないとこの状態は説明できませんね」

と王子が呟いた。

「この状態？」

「そう。どうやら僕たちは、ズア川を逆流してきたみたいなので」

「えっ。って、ここどこな訳？」

王子は地図を開いた。

「ムルーが言うには……多分ここだって」

と言って王子が指したところは――。

「じゃ、もうプリチュ王国でてるの?!」

「そう。ここからならハーレ王城まで、四日もあれば充分辿り着ける。えいくそこのやろ点かな」

ムルーが火打ち石と格闘していた。

確かライターあったよね。ごそごそと荷物を探す。ええつと……袋が沢山あると大変……。あ、あったあった。

「ムルー、替わる」

ぼっ。ついたついた。枯枝を燃やして、と。

「へー」

王子は目を丸くしていた。

「便利な物だな」

とムルーも言った。

「でしょ。ライターっていうんだよ」

「ふーん。じゃ、火もついたことですし――と言っても枯枝があまりなかったんでこの火も長くは保たないと思いますが――王子、着替えて服を乾かしちゃいましょう」

うん。確かにいくら夏とはいえ寒いわ。全身濡れ鼠じゃ。

「そうだね。じゃ、はい、里菜。体ふく布と着替え」

「ありがとう。じゃちよつと向こうで着替えてくる」

えーと、今渡されたこの服ってつまり貫頭衣なわけか。ふーん。古代のっぽい服って興味あったけど、まさか着る機会があるなんて

ね。

ドニートにどんな意図があったのかはわからないけど、とりあえず四日分得したわけだ。かくなる上はプリチュ王の追手に追いつかれないうちにハーレ王国に入らないとね。

それにしても、サオトムって一体誰だろう？何でその人が私のことを言ってたって？

——ま、とにかく、行くしかない、と。

九、さて一体どうなることやら。(後書き)

「第一章 虜囚」はこれにて終了です。第二章は「逃亡」になります。その名の通り、逃亡生活をお送りします。

一、月（前書き）

一章では続けて読むと粗筋になるサブタイトルをつけていましたが、それを延々と続けるとネタばれもいいところなので、二章からは普通のサブタイトルでお届けします……。

一、月

うーん。どうしようかなー。

ズア川沿いの森の中で気付いて以来、時折休みを挟みつつ歩き続けて、今は夕方。所は草原。

王子とムルーは弓矢とかの武器を持って少し先まで出掛けていった。――十分位前にムルーだけ一度戻ってきて、料理をしろと言って材料を置いていった。で、私は今、その材料の前で目一杯悩んでいる……。

別にね、料理が出来ないってわけじゃないんだけど。家庭科の調理実習の時のノートさえ（あと材料と）あれば、親子丼だって作れるし、ちらし寿司だって作れる。

そりゃあね、料理が得意だ、なんてどうあがいても言えないけど。だけどノートがなくなっちゃって、目玉焼きとか焼き肉とか、とにかく生存してくのに困らない程度の食べ物なら作れる。――自分の世界でなら、ね。

こんな……ムルーがそこらで狩ってきた、何だかわからん動物の、死体を置いてかれたってどーやって料理するかなんてわかるわけないじゃないか……。

結局、なす術もなく、王子とムルーが帰ってくるまで私は火だけおこして待っていた。

「何、だ。全然出来てないじゃないか」

帰ってくるなりムルーが言った。

「――私はそもそも皮のはぎ方からして知らないぞ！」

ムルーは新たな獲物をその辺に置くと、坐り込んで小刀を手にし、〈夕食の材料〉に向かってざくざく手を動かした。

「――出来ないなら出来ない、さっさと言やあいだろ。そうしたら無駄な時間を作らずに済んだのに」

う、やっぱさっきまで生きてた物が切り刻まれるところなんて、あんま見るもんじゃないな。目、そらしたいけど――しかし、これから御馳走になろうというのに、目をそらすというのも礼儀に反してるような気がして、ほとんど睨むような調子でそれを見つつ、それで口答えをする。

「お言葉ですがね、料理をしるただけ言って有無を言わず、ここからさっさといなくなったのはどこのどなたでしたっけ？」

「……」

へん。ほーら何も言えなくなった。ま、わかってるけどさ。ムルーが王子から一時たりと離れていたくないっていうのは。いくら四日分のリードがあるとはいえ、気は抜けない状況だもんね。

おっと。私とムルーの問答を聞いて、王子がずっとくすくす笑ってる。ふーん。気は抜けない状況なんだけどね、王子にとっては楽しいらしいや。何となく顔色もいい。

「王子、元気だね」

王子はにこっと笑って。

「あんまり笑ってられる状況でもないですよ。でも狩――どころか城から出たのも七年ぶりだからつい……」

「――七年間ずっと城の中?! そりゃひどい。そーか、それでそんなに青白い肌に――なったわけじゃないのか。よくよく見てみればムルーの肌もちよっと青味がかってるか」

「?――どちらかといえば里菜の肌の方が珍しい色だと思いますけど?」

ん? じゃこの星の人はみんなちよっと青味がかった肌ってことか。ムルーが肉を小枝にさして焼き始めた。

あ、そういえば……。

「王子、訊きたいことがあったんだ。サオトムって誰?」

「サオトム? サオトムっていうのは山の民長のことです」

「山の民ってえーとトムの?」

「ああ、そうとも言えるし……そうじゃないとも言えるし……って

とこですね」

「あん？」

「えーとですね、サオト^{トム}ムというのは全ての民の上に位置する人達なんです。だけど直属の民はやっぱり山の民^{トム}です。だから山の民には長がいませんしね」

「ふうん???」

うーむやっぱり異民族の慣習(?)って理解しがたいものがあるなー。

だけど確か、聞くところによれば流浪の民自体かなり偉いんだよね。その民みんなより上なんだから相当なお偉いさんなんだろーな。うーん。

「焼けた、な。——王子、どうぞ」

「有難う」

「ほら里菜」

「どうも」

それで三人で肉にかぶりついた。うーん、味がないよー。お醤油が欲しい……。これから先の冒険行を思えば、やっぱエネルギー源は取つとかなきゃいけない。だから食べるけどねっ味がなくても。

だけど一体、何の因果でこんなことになっちゃったんだか。ほんとに全く……。

夕飯を終えてから、残りの肉を袋に詰めて、そうしてさっさと寝ることにした。

日はもう沈んでしまったし、お月様はまだ出てなくて、行程を進めるにはちよっと暗すぎる、というので、早寝早起きをして朝歩くことに決めたのに目が冴えて眠れない。

——日頃、街燈で闇夜ですら明るい所にいるから知らなかったけど、月が出てないと夜は本当に暗い。もっとも獣除けに火を焚いてるから、この辺は少しは明るいけど。

ごろっと体を動かして、仰向けになる。——うん、星がよく見え

るなあ。地球じゃないなら当たり前だけど、知ってる星座は見当たらない。でも私、地球の星座だって北斗七星とカシオペア座とオリオン座ぐらいしか知らないんだけどね。

うーん、本当に感動するぐらい星がよく見える…あれ？ちよつと待て、変だぞ。私今、コンタクトレンズも眼鏡もしてないよね。なのに何だってこんなによく物が見えるんだ？

——例えば地上の光が邪魔しないから、とか、空気が澄んでるから、とかで星が普段より多少よく見える、なんてことはないわけじゃないだろうけど、いくらよく見えたって、その程度は〈多少〉だよな。——今〈異常〉によく見えるぞ……。

忘れてたけど考えてみたら私って目すごく悪いんだよね。左右とも○・一ないもん。……○・○一位かな。そんな視力で星空が見える筈がない。それに牢で目が覚めて以来ずっと、見えない！って思った覚えがないし、王子の顔もムルーの顔も判別出来てるんだから、うーん何でかわからないけど、私は目がよくなったらしい。

——そんなことを考えていたら、いつの間にか月が出ていた。半月かな。うー、考え事してたせいか余計目が冴えてしまった……。眠んなきゃ。

それでごろごろ動き回っていたら、王子が目を覚ましてしまった。「里菜？眠れないんですか？——明日は今日以上に強行軍になると思いますし、寝ておかないともちませんよ」

「うーん、それはわかってはいるんだけどね」

うん、やっぱり一メートル位離れた所で横になってる王子の顔さえはつきり見える。やっぱり目、よくなったらしい。

王子は空を見て言った。

「——月が出るところですね」

へっ？月ならさっきから出てるよ、と言おうとして、私も空を見、そして絶句してしまった。なんでか、というと——月が、二つあった。

ああ、ここって本当に地球じゃないんだなあ、と、何だかしみじみ納得してしまった……。だって、地球には一個しか衛星ないもんねえ。

私が一人、しみじみ納得してるうちに、王子はまたすやすやと寝息をたてて眠りに落ちていった。今度は起こさないように気を付けようっと。

……星がよく見える。

ここが本当に地球とか離れた星なら、あの中のどれかが、私が日頃見慣れた太陽かもしれない。——でも、宇宙船になんて乗った覚え、ないんだけどなあ……。

一、月（後書き）

親子丼とちらし寿司は私が高校生の時に調理実習でやったメニューです（苦笑）。

二、草原の民《プテス》（前書き）

予約投稿に初挑戦してみます。

……そして失敗して即日投稿になりました……。
のでした）

（日付を間違えた

二、草原の民《プテス》

うとうとうと……と、やあっと、眠れ始めた頃、ムルーに叩き起こされた。うー、もう朝か。眠いよー。

突然パンが飛んできた。

「ぼーっとしてないで、喰え！」

「あーうん……」

でもロールパンの仲間だなあ。苦手だなあ。間に何かはさんだりすれば、ロールパンでもまた話は別なんだけど。仕方ないから食べるけど——しくしくおうちが恋しいよお。

私ともぐもぐ食べてる間に、さっさと食べ終わった王子とムルーは、地図を広げて話をしていた。

「今は多分この辺、です。プリチュ王城からここまで、馬でも二日はかかりますから——追い付かれるとしたら、今晚か明朝くらい……」

「うん。でもこんな先まで来るとは追手も思っていないだろうね」

「それはそうですね。でも油断は禁物ですし——。追い付かれたらやっぱり戦って血路を開くしか道はないでしょうが……」

ムルーは少し考え込むと私の方を向いて言った。

「里菜、お前剣を使えるか？」

「使えない。——というか、使ったことない」

と私は答えた。

ムルーは渋い顔をして。

「……男に見えてもやっぱり女だしな……使えないのか……」

「え？ 私、男に見える？」

と訊いたら王子が答えてくれた。

「背、高いし。髪短いから。——男の人は髪の毛長かったり短かったり色々ですが、髪の毛の短い女の人っていませんからね」

ふうん。でも背、ねえ……。

「背高いって、ここじゃみんな身長どれ位なわけ？」

「女の人が一ティぐらい。男の人で里菜ぐらい、かな。ムルーやロツフ王はかなり大きいですけど」

じゃ、女一五〇センチ、男一六〇センチってどこか。うーん、それじゃ私でも背が高いことになるな。学校じゃ真ん中ぐらいなんだけど。

私がパンをやっと食べ終わったので、出発することになった。よしよつと。足に巻きつけてある靴の紐しめなおして。万が一通行人でもいた時の為に、布をかぶって髪の毛全部隠してつと。

「里菜」

ムルーが呼んだのでそっちを見ると、ムルーが鞘ごと剣を差し出していた。

「使えなくても、一応持ってる。ないよりはいい」

ふむ。私はそれを受け取りつつ、言った。

「じゃこれは持っておくけど——それならムルーが保管室から持ってきた物、私に持たせてくれない？今、ムルーが持ってるでしょ」

「？それは別に構わないが——どうせお前にしか使い方わからないんだし——どうするんだ？」

「んー、切り札があるんだ。——どーせ追手は私のことを魔かもしれないと思ってるんでしょ？だったら魔のフリするのも効果があるんじゃない？——上手くすれば魔王並にこわがってもらえると思うよ」

上手く使えば、ね。

そしてそれから数時間、私達は歩き続けていた。色々なことを喋りながら。

喋っていて知ったんだけど、今日ってここでは八月二十四日なんだそうだ。

「それじゃ、旅を始めた昨日が二十三日で、牢を逃げたおとといが

二十二日で……私がここに來たのが、八月二十日？」

「ええと、確かそうでした」

ふーん。ここに来る前の地球は九月の半ばだったけど。——うーむ。私は今日で四日も学校を休んでるのかな。お父さんやお母さんやお兄ちゃんや、先生とか友達とか、一体私はどこに行っただと思ってるんだろうか。

あれっ後方から……馬か何かに乗ってる人の集団が。追手?!と私が思うより早く、ムルーは目をこらし、王子は叫んだ。

「ムルー! 追いつくにしては早過ぎるけど——追手?!」

「いえ、あれは……草原の民のようです」
フテス

「草原の民?! 本当に?!」

王子が、私が見る限り初めて、子供らしくはしゃいだ。

「どーかしたの? 王子」

「僕草原の民って初めて見るんです!」
フテス

「王子は、プリチュ王国にいた時のみならず、ハーレ王国にいた時でさえ、年に一、二度の遠出以外では国から出たことないですからね。——この分だと、あの小群団ごく近くを通りますから、しっかり見ておいて下さい」

ムルーが言った通り、その草原の民の小群団は近くまで來た。だけれど來ただけではとどまらず、その一群の先頭を走っていた、リーダーらしい人の合図で、私達のごく近くで止まってしまった……。

おおおおお! そのリーダーらしい人の乗ってる馬は、もしかしてユニコーンではないか! 一角獣! ——黒い綺麗な馬体の額から、白い角がすらっとのびている。……これは間違いなく一角獣! うわーうわー、きれー。かっこいー!

ユニコーン
お馬さんにミーハーしていると、そのユニコーンの乗り手は、ユニコーンに乗ったまま、更に近寄って來て、言った。

「旅人か? お前たちは」

「ああ、そうだ」

とムルーが答えた。

ふうん、この人若いなあ。二十ってとこかな。若いのにリーダー
ってことは、身分があるか、余程きれる人かってことかな。

と、観察していたら、向こうもじっとこっちを見た。やば。失礼
だったかな。かと言ってここで目をそらしたらもっと失礼だろうし
……。

にこっ。

笑ってみたけど、ひきつっちゃった……。

すると、その若い男が言った。

「娘。変わった色の瞳をしてるな。どこの者だ？」
うっやばい！目の色が人と違うの忘れてた！！

「あのですねーどこの者かと言われましても……」

「え？どういう言葉だ？それは」

へっ。あー私は翻訳機してるから向こうの言葉、わかるけど、向
こうにしてみれば、私の使ってる言葉はわけのわからない言葉なん
だ……！

「えーとえーと、ムルー！翻訳機！」

「今朝お前に渡した袋の中だ」

「あ、そうか。えーとえーと」

何か、あせって探そうとしたら上手くいかない。そうしたらムル
ーが私から袋をひったくって、落ち着いて探してくれて、そして一
組の翻訳機をその男に差し出してくれた。

「これを耳に」

と言って。

「耳？ああお前たちがしているようにか？」

その人はしばらく、手のひらにのせた翻訳機を観察してから、そ
れを耳にはめてくれた。

「えーと、わかります？」

と私は言った。

「ああ」

「どうも失礼しました。初めまして」

その人はまたしばらく私を見て、それから言った。

「……変わった奴だな、お前は」

「そうですか？ たかだか目の色が違って、言語が違いくらいでしよう？」

「それだけでも大したものだと思うが。この星には言語など一つしかないのだから」

「え……そうなの？」

振りかえって訊いたら、王子がうなずいた。

「大体、それだけじゃないんじゃないか？」

とその人が言うので、えっと思って正面を向くと、その人の腕が私の頭の布にのびていた。

げっ。それとっちゃだめだよ——。だめだつつうのに、あーあ。

「ほらな」

その男は、にやっと笑った。——後ろの、馬に乗った団体さんは驚いていた……。

二、草原の民《プテス》（後書き）

昔この部分を読んだ友人から「言語が一つなのに、どうして翻訳機があるの？」と訊かれました。うっかりしていた……わけではなく、伏線なのですが、伏線が回収されるのはかなり遠い先の話……。

三、レスティ（前書き）

くやしいので再度予約投稿に挑戦。

三、レスティ

まだ、昼だった。プリチュ王国を脱出して二日目——つまりこの世界に来て五日目の。

なのに、急いでハーレ王国に行かないといけない筈の私達三人は、何故かテントの中にいた。

勿論、私達がそんなものを持っているわけがない。草原^{プテス}の民のテントだった。

プテスさんだって、夜行性じゃあないだろうから、わざわざ昼間にテントを張った、というのは、ひとえに私達を招き入れるためだろう。

そうなる、それがむしろさんの好奇心を満たすためでも断わるわけにはいかないよなあ。もし仮に、急いでるからって招待を断わったりしたら「無礼者!」とか言って怒りだしそうだし。(「流浪の民」っていうのは、そこらの人間より偉いから、そんなことをしたら実際無礼なんだそうだ。おまけに草原の民って短気でケンカ好きらしい。ムルーが言うには) そうなったら「多勢に無勢」ってものだろう。それに何より、王子とムルーが御招待を受ける気になったのには、私のこの台詞が効いた。

「御招待というからには、何か食べ物でるよね。——私らってあんまり食糧持っていないんだよねー」
という……。

「さて」

と、テントの一番奥に座っている若いリーダーさんが言った。

リーダーさんの正面に、私達三人がいる。但し! 正面とはいえ両脇にずらずらずら〜と人が座っているわけ。つまりテントの一番手前、出入口が一番近い所に座らされているわけなんだな、私達は、で、えっと私達とリーダーさんの間に、一・二・三・四・五……

十一人ずつ。私達もいれると二十八人が一つのテントの中に余裕をもって座ってることになる。——いかにテントが広いか、ですな。それに加えて、料理を持って出入りしてる人が結構いるみたい。いやはや。ほんと、すごい広さだ。

「さて、お客人。特に真ん中の娘には、正体など明かしてもらいたいところだが」

私に対して発せられた質問のようなのに、私の右隣のムルーが言い返した。

「その前にそっちの正体を明かすのが筋ってもんじゃないか？」

うーむ、小説か漫画で見かけたような台詞だ。

でもって、ムルーからリーダーに発せられた筈の問いには、リーダーの左隣の、一番年とってそうな人が言い返そうとした。

「若に何という無礼……」

「じい、よい。——確かに筋だな。私の名はレスティという」

「レスティ？」

ムルーがちよつと首を傾げた。

「草原^{ブレス}の民でリーダー格で若でレスティ？どこかで聞いたこと——あつ！草原^{ブレス}の民の長の息子で、次期長のレスティ？」

「ほう、よく知っていたな。流浪の民の長の息子の名など有名ではあるまい」

「——俺も流浪の民だからな」

とムルーが答えると、レスティとかいう人は興味を持ったらしく、

「ほお！どこの者だ？——今度は答えてもらえるんだろうな？」

と言った。ムルーはそれに答えて言った。

「勿論。——俺は砂漠^{アベリ}の民のムルーという者だ」

そうしたら周囲がざわついた。そのざわつきを代表してか、へじいゝが尋ねてきた。

「砂漠の民のムルー？！あの、半伝説化している傭兵の、か？」

「そうだ。が、半伝説化、というのは一体何なんだ？」

その問いには、レスティさんが答えた。

「数年間、行方不明だったろう——そうか行方不明の間、その娘に仕えていたわけか」

ぶっとムルーは口に含んでいた飲み物を吹き出した……きたない！

「冗談！何で俺がこんな小娘に！俺が仕えているのは——」

ムルーは台詞を途切れさせた。言うべきことかどうか、悩んだんだろう。だけど既に、レスティさんの視線は王子に向かっていた。

「それならお前の仕えているのはその子供、ということか？——その娘が小娘なら、この子供も十分小僧だと思うが……。さて子供、お前の名は？」

あっけらかんと、王子は答えた。

「トーレ、です。レスティ殿」

周囲がまたもやざわついた。

「トーレ……王子？」

「ハーレの王子の？」

「プリチュの王子の？」

「ざわざわ」

うーむ、我ながら笑える状況描写だ。

で、レスティさんが言った。王子に向かって。

「トーレ王子？仮に貴公が本物のトーレ王子だったとして——プリチュの次期王たるものが、こんなところで、この少人数で何をしているのだ？」

周囲が——わきたった。レスティさんの問いに対する答えなんて、みんな聞かなくなっちゃってわかってるんだろうな。だから、もし王子が本物なら、プリチュに連れていけば謝礼がもらえる——そう考えてわきたっているらしい。

で、ざわざわが最高潮の中で。レスティさんは私に訊いた。

「娘。いやに落ち着いてるが、どうしてだ？」

「——こうなることが十分予想できる状況で、王子が不注意で自分

の名をもらしたとは考えにくいから、何か勝算があるんだろうと思
って」

と私は言った。（ちなみに翻訳機はレスティさんにしか渡してない
ので、私の台詞はレスティさん以外の草原の民の面々には通じない）
——けど心中は全く落ち着いてなかったりする……。でも王子って
並の十二才じゃないからな。私なんかよりよっぽど冷静。時には
二十八歳のムルーよりも大人に見えたりする程。だからこの場は王
子に任せてしまおう。

「勝算が……あるのか？」

とレスティさんは王子に尋ねた。王子は静かに答えた。

「大したことじゃないんですけど」

で一拍おいて。

「ただ草原^{フテス}の民はプリチュには寄り付かないようにしているらしい
し——、謝礼は別にプリチュからしか出ない訳じゃありませんから」

「——だが、プリチュの王に恩を売っておけば後々便利だ」

「あの王が恩などを買うわけがありません。——第一、誇り高き草
原^{フテス}の民ともあろう者が、魔などと手を結ぶつもりですか？」

「……」

うーん、この勝負、王子の勝ちだな。やっぱ十二才とは思えない
な。ムルーがべた惚れなのもわかるな。で、ムルーの方を見て
みると。案の定、得意気な顔をしていた。

「トーレ王子」

とレスティさんが言った。

「気に入ったぞ」

そしてにこっと笑った。ああ、一安心……。と思ったら、レステ
イさんは突然こっちを見て言った。

「娘。お前の名前を聞いてなかったな」

「……里菜です。松浦里菜。——どーせ訊かれるんだろうから言っ
ときますが、出身地は日本ですからねっ！」

三、レスティ（後書き）

笑える状況描写とは「ざわざわ」のことです。……解説を入れなくてはわからないかも、と思ったので、書いておきます（^^；。

四、手合わせ

そうか『飲めや歌えや……』っていうのはこういう時に使う言葉だったわけか。と、思わず納得する騒ぎが起きていた。

「半伝説化した傭兵」のムルーはほとんど主役していて、王子と私はなーんとなく、隅っこでものを食べていた。

うーん、このドーナツ型した果物は美味だなあ、などと呑気に考えていたら、いつの間にやら隣にレスティさんが来て座っていて、そして言った。

「娘」

あーもう全く。ムルーといいレスティさんといい……この星には女やら娘やらって呼ぶ習慣があるのかね。

「――あのですねーレスティさん。私にや里菜っていう、立派……かどうかはわからないけどとにかくちゃんとした固有名詞があるってさっき言いましたよね」

「……ああ、これは失礼。リナ、か。――リナ、先ほど言っていた、にっぽんというのは何なのだ？それに、お前の髪や目の色、その言語……」

――思わず私は王子に助けを求めましたね、本当のことを言うべきか否かの決断の。そうしたら王子が頷いたし、まあ私もこの人に嘘を言ってもムダのような気がするし（もっとも本当のことを言っても信じてくれるかどうかはわからないけど）とにかく話してみることにした。

「ほう……」

とレスティさんは言った。

「テアーアリ星ですらない、むやみやたらと遠い所にある、地球という星の、日本という国にいたはずのお前が、目覚めてみればテアーアリ星のプリチュ王国の牢の中だったと」

「あ、現われたのは僕の目の前でしたけど」

と王子が口を出した。

「――で、それを私に信じろ、というのか？」

「別に。信じる信じないはレスティさんの自由だと思いますし……。信じられません？」

「さあ。――ま、どちらかといえば、そんな作り話を思いつける、という方が信じられぬしな」

レスティさんがそう言った頃、ムルーの辺りのざわめきが一層大きくなった。みんな、

「おお、それはいい」

とか何とか言っている。で、レスティさんが近くの人を掴まえて訊いた。

「どうした？」

と。するとその人は、

「あの、アインの奴が、ムルー殿の剣技を見てみたい、と言い出しました……」

と答えてくれた。――成程。それでムルーが、

「別に見せる程のものでは」

とか言って断っているわけか。――ムルーがそんな風に拒否しているにもかかわらず、レスティさんは事の成り行きを聞くと、

「それは面白い」

と言いつつ立ち上がって、ムルーに向かって言った。

「是非手合わせを願いたいものだな」

ムルーは思いっきり渋い顔をした。

少し経って。テントの中にいたメンバーは皆そろって外に出て、円を作っていた。私と王子も円の構成員。

円の中にはレスティさんとムルーが、各々の鞘から抜いた剣を片手に立っていた。

――つまり、ムルーは断りきれなかったという訳。

ムルーは剣を軽く手のなかで玩ぶと、一つため息をついて、それからちゃんと柄を握った。

その様子を見てレスティさんは、

「用意はいいみたいだな、では」

と言って、剣を持った腕を伸ばす。そして軽く、二つの剣の刃先が触れ合った。

途端、手合わせが始まる。

ムルーが左から右へと、剣を持つ手――右手を動かし、レスティさんの剣を薙ぎ払おうとする。

レスティさんはすつとほんの少しだけ後ろによけて、ぎりぎりですそれを躲す。

難いだ反動でムルーの右手が大分右に行き、体の正面があく。

その隙を狙ってレスティさんがムルーに斬り込む。

ムルーは右手をそのまま後ろに回し、斬り込んでくるレスティさんに向かって思いっきり振り下ろす。

ガキーン、と二つの剣がものすごい音をたててぶつかる。

――変な話だが、心配してしまった。刃こぼれしないだろうか――
|?

合わさった剣先が、次第に上へと持ち上げられる。

二人とも柄に両手をそえて、満身の力をこめているのが、腕と剣先の震えでわかる。

けれども剣はそこから少しも動かない。

その状態でレスティさんが口を開いた。

「さすが、伝説と化しているだけのことはあるな」

ムルーも言った。

「そちらもな」

そしてどちらからともなくニヤツと顔に笑みを浮かべると、どちらからともなく剣を引き、鞘におさめる。

張り詰めていた場の雰囲気が一遍に和ぎ、周囲が沸き立つ。草原の民たちは我先にとレスティさんとムルーの周りに群がり、私と王

子は何となく取り残される。

ふう。すごく長かったような、短かったような時間だったな、と思っていると、王子が、試合中ずっと息を止めていたかのように深い深い息を吐き、そして言った。

「――すごい試合でしたね」

「……そう？」

「だって、どちらかにスピードがほんのわずか欠けていても、力がほんのわずか欠けていても、欠けていた方は命を落としていたでしょう。――短かったですけど、それだけ本気な……すごい試合でしたよ」

と王子は言う。でもな―私、剣の戦いなんてテレビの時代劇のちゃんばら位しか見たことないもん。よくわかんないよ。

そして――さっき以上の大宴会がテントの中で始まった。聞くところによると、何でも、レスティさんという人は草原の民で一番腕がたつらしい。そのお人と同等の腕前を持つっていうんで「やっぱり噂は嘘じゃなかった。すごい、すごい」と、ムルーはさっき以上の人気で……。いやはや。

勿論、「半伝説化してる程の傭兵と同等に戦った！やっばうちの若さんはすごいぞー」ということで、レスティさんに酒を勧める人だって多かったんだけどね。――どーしてこの人は輪から抜け出るのがこんなに上手いんだ？……つまり、また私の隣に来てるんだよね、レスティさん。

レスティさんは場の中心になっているムルーを見つめながら言った。

「――いい奴だな、あいつは」

そしてそれからいきなり王子と私の方に目を転じて。

「ムルーが半伝説化していた訳は、実は行方不明だったということ以外にも理由がある。――『傭兵のムルー』はある一定の時以前の経歴がまるで不明である、ということだ。砂漠の民の出だと言われているが、それは結局自称だしな」

レスティさんは左手に持っていた杯の中身をぐいと飲みほすと、杯を下に置いた。……それにしてもムルーの経歴ねえ。

「だから気になったんだが、剣を合わせてわかった。素直な、いい奴だな」

そしてレスティさんは、立っている左膝の上に左肘をつくと、その手で自分の顎を支え、目を細めてムルーを見つめた。

そうそう。あんな、上に馬鹿がつきそうなくらい一本気な奴がね（とはいえ、「馬鹿一本気」とは、普通言わないか）、経歴の一つや二つわからないからっていやな奴の訳がないよ。——と考えていると、どうやら王子も同感らしく、にこにこしてムルーを見ていた。突然レスティさんは肘を下ろし、王子の方に向き直って言った。

「トーレ王子」

王子はすつと真面目な顔になり、王子とレスティさんの間にいる私もつられて厳粛な気分になって、唇を噛む。

「貴公はこれからどうするつもりなのだ？プリチュ王国を出て」

王子はほんの少しだけ私を見た。それからはっきり堂々と、力強く言った。

「プリチュ王国の支配下から、ハーレを独立させます！」

レスティさんは王子をじっと見つめて、それから言った。

「——勝算は？」

「十分です。ハーレは国力もアップしてるし戦力も……」

レスティさんは軽く手を振って王子を制すると言った。

「それはわかってる。だがそれは勝因になりえない。前回の敗因を克服していないのだからな」

わっその先は言わないでほしいっ王子に自殺されたくないっ。——そういう嘆願の目でレスティさんを見上げたのに……くすん。無情なんだから。

「ハーレ王を筆頭に、ハーレ国民は精神力が全く向上していない」はつきりきっぱり言い放っちゃった。そのうえ、更に言った。

「だからきつと、ハーレ王は再戦争よりは植民地のままを望むだろ

う。それどころか王子、貴公が帰られても受け入れさえしないかもしれない」

「……失礼します」

王子はふらつと立って、ふらふらつとテントの外へ出て行った……。えーい。私はレスティさんを睨みつけて言った。

「いたいけな子供をいじめてっ」

「王子は——特に独立戦争を起こそうなどと企てている王子は、いたいけな子供であってはいけない。——違うか？」
うー正論だ。

「それに、ハーレ王が王子を受け入れないだろう、というのも十中八九確かだ。——そしてプリチュ王に捕まるよりは、今のうちプリチュに帰る方が王子のため、と思う」

そりゃね、確かに王子の事を思っ言ってくれてるのかもしれない。でもあと一月もあそこにあのままいてごらん。もしくはここから引き返そう、なんて言っごらん。十中十、王子は自殺するよ。うー……。

「——ほっというて下さい」

「え？」

「国民に気力がないのなら、気力ぐらい起こさせてやるわよっ！」

——またひらきなおっちゃった……と思っ、少々自己嫌悪してたら、レスティさんは言った。

「お前にならやれるかもしれぬな」

「へっ？」

「お前になら、な。——ムルーがお前に仕えている、と私が思ったのは、お前にそれだけの器を見て取っだからだ」
はあ……？

「んな……私は一介の女子高生ですけど」

「……お前が一介の、なら、じょしこーせーとやらは余程恐い生き物なんだろうな……」

背後から唐突に聞こえた、この聞き慣れた声は……。私は後ろを

振り向いて、その人物を見た。

「ムルー！」

なんで宴会の主役が抜けても、場の空気が変わらないんだ？と思って辺りを見ると、みんな酔い潰れていた……。

ムルーはそれ以上私には構わず、レスティさんを見ると言った。

「――俺は王子なら国民に気力を起こさせることができるだろうと思っていたのだがな」

「ふむ。――確かに、お前が惚れ込むのもわかる程に、あの王子は賢い。……なのに何故あの一点だけ、ハーレはプリチュに勝てないだろう、という点だけはあんなに頑固に認めないのだ？」

レスティさんの問いにムルーが答えた。

「さあ。――勝って欲しい、という愛国心が王子を盲目にさせてるんじゃないか？」

レスティさんは静かに言った。

「……盲目にさせるようなものなら、元凶を取り去ってしまえばいい」

元凶――というのは、ハーレ王国のことだろうな、やはり。とすると……この人は何を言ってるんだ！？

「この場合は愛国心をつきとおせば済む話でしょ！」

思わず叫んだ。ムルーが弁護してくれた。

「そういうことだ。――それに俺は王子にプリチュの魔の後継ぎにはなって欲しくないし。……だから可能性が低くても、王子がハーレの王や民に気力を起こさせることに、賭ける」

一瞬の沈黙。そしてレスティさんは笑いだした。――と……突然笑うなよ。驚いたじゃないか。

「三人それぞれ面白いな、お前達は。――お前達がそこまで言うのなら、のっってみるのも一興……。大した事は出来ぬが、協力はしよう」

わ……本当？わーい。

私は立ち上がってお尻をはたくと、

「王子に知らせてくる!」

と言って外に向かった。

出入口にあたる部分のテントの布を少し上げて、外へ出ると、もう暗かった。

相変わらぬ見知らぬ星空の下で王子を探すと、二十メートル位先に、こちらに背を向けて座っている王子を発見した。

草を踏みながら、王子に向かって進みつつ考えた。ムルーは王子が、ハーレ王国はプリチュ王国に勝てないであろうということを認めたがらないのは愛国心のせいだろうと言っていたけれど、本当にそれだけだろうか、と。

だって、本当にそれだけなら、プリチュ王国から逃亡するのは現在でなくたって構わない筈。――もう、七年も待ったんだから、今更一月や二月位待てそうなもんだ。

なのに王子は、（放っておけば近日中に私が処刑されただろう、ということもあつたのかもしれないけど）やたらと急いでいる。――焦っているようにすら見える。……なんで？

――私は王子の後ろに立ち止まって、言った。

「王子」

王子は振り向いた。その顔に、哀しげな表情を浮かべて。

えーと、こういう時は何を言えがいいんだ？ うーんわからん。

「……元氣？」

王子はクスッと笑って、

「元氣ですよ」

と言った。私は、王子の隣に腰を下ろした。

何となく二人で、夜空を見上げていた。まだ月は一つも出ていない。――テントの周りに立て巡らされた松明がなかったらさぞ暗だろう。

「――里菜」

王子が突然そう言ったので、私は隣の王子を見た。王子は尚も星空を見ながら続けた。

「以前、僕のためにハーレ王国は植民国となっていて、そんなのはいやだから、プリチュ王国から逃げたいんだと、言いましたよね」

「……うん」

「それは確かに真実だし、ハーレ王国独立のためなら、この命を賭けてもいい、というのも本心ですが——別の、真実もあるんです」

王子は相変わらず私の方を見ずに、話を続けた。

「——七年前、プリチュ王ロッフがハーレ王国に戦いを仕掛けたのは、彼の世界征服という野望のための第一歩でした。そして今、ロッフ王はそれを再開しようとしています。——戦乱期にあるこの世界を平定する必要は、確かにあるでしょう。だけどそれを、現在の^{いま}ロッフ王にやらせるわけにはいかないんです」

……何で今のロッフ王じゃダメなのかはわからないけど……。

「それが、プリチュを出て、ハーレに反プリチュ戦争を起こさせようとした、もう一つの真実？」

そう訊くと王子はこっちを向いて微笑むと言った。

「まあ、そうです。だから——ロッフ王の世界征服を阻止するのが第一目標なんだから……。もし父が植民地のままの方がいいと願うのなら」

王子はいったん言葉をきり、視線を下に落として、固く結んだ自分の右手の拳を見つめ、唇をきつく結ぶと、少しずつそれをゆるめて、そして言った。

「僕がこの手でプリチュ王を殺します」

四、手合わせ（後書き）

剣の打ち合い……よくわかりません。
しかしこの話では今後出てきます。悩みどころです……。

五、追手

「僕がこの手でプリチュ王を殺します」

王子の口から、ついさっき、哀しげに発せられた言葉が、しばらく頭にこだました。

それから王子は、すっと立ち上がると一回だけ私に微笑みかけて、それからすたすたとテントに戻った。私も慌てて後を追った。

テントに入っすぐ、王子は涼やかにレスティさんに、急に席を立った非礼を詫びた。

そして腰を下ろしてから、プリチュ王を自分で殺す、という決意の程を表明した。

それを聞いて、レスティさんは、

「ほう」

と言ってにやっと笑った。王子にプリチュ王が殺せるなら、ハーレの国民がどれ程氣力を欠いていたって問題はないわけで、その辺を考えて生まれた笑みだと思う。

それからレスティさんは、本当は私が王子に伝える筈だった事を、つまり協力しよう、ということと言った。

王子は静かに言った。

「協力して頂けるんですか？」

「ああ——大した助けにはならぬかも知れぬが、ま、貴公らをプリチュ王の手の者から隠してハーレ城市へ送るくらいのことは」

それだけでも大した助けだと思う。

「で、貴公はどうするつもりだ？ 具体的には」

レスティさんの問いに、王子は杯を置き、顔を上げるとまっすぐレスティさんの目を見て言った。

「とりあえずは歓迎されないとしてもハーレに正面から入国します。——そして、父をどうしても口説き落とせないようなら。父が植民地のままを望むなら。その時はプリチュ王国に戻って、そして——」

王子はそれきり黙ってしまったけど、レスティさんにもムルーにも、それから私にも後に続けられるべき言葉はわかっていた……。

えーと、今晚か、明日の朝ぐらいだろうって言ってたっけ、追手に追いつかれるの。

——そんなことを考えながら、テントの中で横になっていた。

酔い潰れた人たちがその辺にごろごろ転がっていて、いびきはすごいわ、歯軋りも聞こえるわ……。

でも、それでもなおかつ、今晚がこの世界に来て以来、一番眠る条件がいいんだよな！。

だってさ、来て二晩は牢の中、石畳の上でじかに眠っていたわけだし、次の晩は、川のそばでびちょびちょになって気絶してた。昨晩は前三日よりはかなり良かったけど、それでも草の上に布一枚敷いてその上で寝るといって、野宿だったし。

そんなわけで、今日はゆっくり寝よう。

てーそーのきき、とかいうものは気にしなくても良さそうだし。

何でかというところ、レスティさんが全員に戒めてくれたんだな、手を出したら草原の民の一族として認めない、と。

流浪の民が一族から見放されると、余程腕のいい剣士でもない限り生きていけないんだそうだ。生活の手段がないから。

それにしても。レスティさんが私達にこんなに好意的なのは、王子がロツフ王を殺せると仮定したからだよね。——あの王子が殺すと断言したからには殺すのは可能なんだろう、けど……相手が魔王だっていうのがいまいち不可測要素だよな。

魔、か。魔力——この世の力ではないもの、か。

「ま、私にしてみりゃこの世界そのものがいつもの世界と違うもん
な」

とりあえず、寝よう。ぐっすりと。

「……て下さい……里菜……起きて下さいってば！」

なーにー？私、眠い。寝かせといてよー。

「そんなもんじゃダメですよ、王子。いいですか？……さっさと起きろ！」

キーン。

頭の中でそういう音が響いた。のそのそと起き上がって、言う。

「おはよ。――今朝もうちじゃないんだ」

いいかげん、いつもと違うところにいる、という状況には慣れた、といえ……目覚める時には、いつも期待してしまう。今までの単なる夢で、私はうちにいるんじゃないか、と。

――欠伸を一つ。

「悪いね。私、寝起きがとっても悪いもんで」

「全くだ」

……かわいくねーなっムルーの奴は。

「そんなことより、里菜。――聞こえますか？外……」

ん？そーいや言い争ってるみたい。なにに？

「……ですから、子供連れの三人組を御覧にならなかったかとお尋ねしているのです！」

「しつこい！見ていないと言っていようが！」

うーん、今のはレスティさんの声だな。それにしても今の会話は……。

「追手？」

王子がこくんとうなずいた。

「レスティ殿が任せておけ、と言って出て行かれたんですけど……」

ふうん。――周りを見回すと、みんな起きてて外の会話に聴き耳をたててる。――何かみんな楽しそうね……。昨日のレスティさんとムルーの試合を見てたときみたいに楽しそう。

どれどれ？

「……ですから三人組を御覧にならなかったかとお訊きしているのです！」

「――見てない、と何度言ったらわかるのだ？」

あん？なんかさっきと内容同じみたい……。

「――そんな筈はありません！王子一行は必ずこの辺りを通った筈なのです！素直に答えて頂きたい！」

「何を？」

「ですから――！」

あ、むかついたな。見た、と決めつけてるくせにわざわざ、見たか？なんて訊くなっつーの！――あーいう奴、中学ん時いたな。体育の教師！憎ったらしー奴！あーいう野郎はどわいっ嫌いだった！！

「――そんな筈はありません！王子一行は必ずこの辺りを通った筈……いや、しかし、確かにここにいるにしては早過ぎる……」

おや、やっと会話に進展があったわ。

「――！そうか、さては貴様ら、草原の民に扮してはいるが、ハーレの者だろう！計画的に王子を城から連れ出して馬で逃げたな！だとすれば、たった二日で大層な距離を進めたのも頷ける……。こういうことはそのテントの中に一行はいるのだな！！者ども調べろ！」

態度をあっという間に転じたおじさんの命令で、ばらばらと足音がこちらに向かってくる。あら困った。――しかし、こんなこと考えてる場合じゃないと思うが、あのおじさんってすごい……思い込みだけで人に命令してる……。まあ今度ばかりはその思い込みも一部は当たってるわけで……。困ったなあ……。

――と。レスティさんがおじさんを制止したようだった。

「待て。確か先程、プリチュ王国の第一隊第七班班長と聞いたように思うが」

「それが？」

「この剣を見よ！ほんのそれ位の身分の者が、草原^{グ래스}の民の長の第一子に妙な言い掛りをつけて、よもやただで済むとは思っていないまいな！」

――息をのむような音が聞こえた。

「草原^{グ래스}の民の長の跡取り？！こ、この剣の紋は確かに……。し、失

礼しました！お、お許しを！」

「許さぬ！」

ヒュン！という音。ザクツという音。そして、テントの、声がしていた辺りが赤く染まった。

それが合図であったかのように、テントの中にいた草原の民達は狂喜の声をあげて外へ飛び出し——で、そのテントの入り口の布を上げたままにしていってくれたものだから、しっかり見えてしまった……天然色の血が乱れ飛ぶ現場を。

言葉も、ない。

目をそらすことも出来ない。

人が、死んで、いく。プリチュの兵士たちが、草原の民の慣れた剣技の前に、為す術もなく、倒れていく……。

——本当は目をそらしたいと思っている。それどころか、この場から一目散に逃げだしたいとさえ思っている。

だけど、ここで人が殺されていく理由の一端は確実に私が担っている。だって、倒れていく人達は、私と王子とムルーを追ってきた人達なんだから。だからこそ、この現実から目をそむけちゃいけない、と理性が訴え——それで私は目をそらすことが出来なかった。まばたきさえも出来ずに、一所を見つめすぎたせいで目が潤んでくるほどにじーっと眺めていた。

わかっている筈だった。王子について独立戦争を起こす手伝いをする決めた時から。人がどんどん死ぬだろう、と。戦争なんて、人殺しの団体戦みたいなものなんだから、と。

だけど目の前の現実は何っこうきつくて、わかっているつもりだったただだと私に思い知らせる。

倒れた人達は、最初のうち、少しは動いている。だけど、そのうちにぴくりともしなくなる。今まで、自分で考えて動いていた人が、ただの物体になってしまう。……死ぬ、というのは、そういうこと、だ……。

わかっていなかった、全然。

人が死ぬところなんて見たこともない。人が殺されるところも当然見たことない。ましてや戦争なんて言葉でしか知らない。

言葉の上での理解しかない人間が、戦争を起こそうとしたところで、やっぱり言葉の上でしかわかってなくて——私は初段階の、人が死ぬという事実すら、自分でさえわかるほどに蒼冷めていた。

人が、殺されていく。——人が死ぬということがどういうことなのか、人が殺されるということがどういうことなのか、そして、戦争っていうものがどういうものなのか、私、全然わかっていなかった。考えてみようとすらしなかった。……考えなくちゃいけない。わかっていなかったということがわかったからには、考えなくちゃ、いけない。

「……里菜。大丈夫ですか？」

私のあまりの顔色の悪さを心配したのか、王子が声をかけてくれた。

ムルーは戦を眺めている。

そこに、レスティさんが戻ってきた。血の滴る剣をひっさげて。

「——ムルーは出ないのか？」

「——ああ。俺が出れば、あんな兵士の十人や二十人、一人で片付く。これはどうやらあんたの民の楽しみらしいからな、譲ってやったというわけだ。——あんたこそ早々の退散じゃないか」

「私はきっかけを作りさえすればいいのだ。——何しろ私は普通の人間だが、あいつらは血を見ないと生きてられないような奴らで」

「はん。——それで言うと、俺も普通の人間に入るかな」

「らしいな。驚くべきことではあるが」

うーむ……。ついていけない会話だ……。普通の人間っていうのは、大量の血を見た場合に蒼冷めるような人だと思ってただけど。蒼冷めてばかりじゃこの世界では生きていけないってことか。

「……里菜は気分悪そうだな。大丈夫か？」

とレスティさんが問うた。

「はあ……まあ、私はせんさいな人間なもので……」

私の〈普通〉はここでは〈繊細〉くらいだろうと思ってそう言ったら、ムルーが言った。

「嘘つけ」

……かあいくないっ！

五、追手（後書き）

初の人死に。

六、一角獣《ラオス》

考えなくちゃいけない、私は。人が死ぬ、ということ。戦争というもののこと。そうして、私はどうするべきか、ということ――。

追手をやっつけたからといって、ゆっくりしてるわけにもいかない、ということ、さっさと朝食が始まった。私はちよつと、あんなシーンを見た後だけに、食べる気にならなくて、人が御飯を食べている間、考えていた。

戦争なんて、起こしていいんだろうか？――いいわけではない。これは私が所属していた世界の常識。でもここはそこじゃない。その常識じゃ測れない。

……戦争を起こさなかったら――プリチュ王が世界征服を始める。世界征服をやめさせる――これはきっと正しい。でもその手段として戦争を用いるのは……正しいんだろうか？

そもそも、私は人を殺せるんだろうか？

「里菜」

御飯を食べ終わったららしいレスティさんが、声をかけてきた。

「馬の様子を見に行くのだが、少々付き合わぬか？」

馬？――あ、そういえば一角獣がいるんだった！あれは是非もう一度見たい！

というわけで、まだ御飯中の、王子やムルーや、他の草原の民の皆様方において、私達は馬を見に行った。

お馬さん達は、テントの裏手の木々につながれていた。でも一角獣さんがいなかった。どこだろう？と思ってきよろきよろしていたら、一角獣は一〇〇メートル位離れた丘の上にいて、遠くを眺めていた。

陽を浴びながら、まっすぐに立っているその優美な姿に、私は見惚れた。……なんて綺麗な生き物だろう――。

私の隣に立って、同じ様に一角獣を見ていたレスティさんが、

「レイ！」

と呼び掛けると、その一角獣はこちらを向き、レスティさんを認めると、丘を駆け下りてきて、レスティさんの側で止まった。――走る姿は、更に綺麗だなあ……。

近寄ると、馬というものがけっこう背が高いことがわかる。乗るところが私の目の高さ位。地球の馬もそうなのかなあ。テレビとかで見たことあるだろうけど、わからないものだな……。

レスティさんがものすごく優しい顔をして右手を差し伸べると、一角獣は首を曲げて、角をその手にすりよせて、すごく倅せそうな顔をした。

――妙に入りこめない雰囲気で、黙って見てたら、レスティさんが話しかけてくれた。

「里菜。一角獣^{ラオス}を見るのは初めてだろう？これは今では数少ない生き物だから」

――一角獣とラオスが重なって聞こえるんだから、一角獣はここではラオスっていうんだろうなあ。

「まあ私は、馬さえも初めて見たようなものですし……」

と答えると、レスティさんは心底驚いたという顔をした。うちの世界では交通手段は馬じゃないんだもん。

「これはレイルギーナという名で、私の持ち馬だ。――草原の民の馬は元々その辺の馬よりも脚力があるが、一角獣は更にパワーがある。ただ、近年数がめっきり少なくなっただうえに、草原の民にも一角獣に乗れるだけの力量のある奴が減ったので、一角獣を乗馬にしている人間はほとんどいない」

と、レスティさんがレイルギーナ君の紹介をしてくれた。うーん、綺麗な奴だ。さわりたい……。――と思っていたのが通じたのか、レスティさんが言った。

「元来は気が荒いが、私が側にいる時なら平気だ。さわってみるか？」

で、首を曲げた状態のレイルギーナ君に触らせていただいた。首の辺りと、その後ろのたてがみの辺り。たてがみは、なんていうか、ふかふか？一本一本はけっこうかたいんだけど、まとまると何かふかふかというかふわふわした感じ。

「他の馬はつないであるのに、レイルギーナは放し飼いなんですか？」

と訊くと、レスティさんはクスツと笑って言った。

「レイは我が友、我が半身。つなぐ必要など全くない」

そしてレイ君をなでる。――何か、妙に幸せそうなカップルだなあ。（これはカップルとしか言い様がない）

「ところでわざわざ王子達と引き離してここまで連れてきたのは、何もレイを紹介するためだけではなく、少々訊きたいことがあったのだが」

とレスティさんが真面目な顔になって言った。――手は相変わらずレイをなでていたけれど。

「何ですか？」

「プリチュの兵士達を殺した時のことだが――」

あ、いかん。一角獣にかまけて忘れてたわ、考えなきゃいけないことを。

レスティさんは続けて言った。

「仮にお前が繊細なタチだというのを認めるとしても……」

……レスティさん、その言い方って何かしら……。とてもせんさいとは思えないって言いたいのかしら。

「あの蒼くなりようは尋常じゃない。――もしかして人が死ぬのを見るのは初めてか？」

まさにその通りだったんで、コクンと頷くと、

「――お前の生国は、余程幸せな国と見えるな。それにしても……」

レスティさんは呆れたような声で、続けた。

「そんなで戦争を起こすつもりか？」

私は答えた。

「こんなで戦争を起こすつもりだったんですよ」

一瞬の沈黙。そしてレスティさんが言った。

「……過去形だな」

「認識がすぐ甘かったというのは、さっき重々実感しました。私は……戦争つてものを、人が死ぬつてことを、理屈でしかわかってなくて……だからこそ、王子が独立戦争を起こすのの手助けをするなんてことを、安請け合いしちゃって……」

レスティさんは静かに言った。

「……それで？安請け合いだったということがわかって、それでどうするつもりだ？」

——そう。どうするのか。——それが一番の問題。

「……悩んでるんです。戦争の是非とか、私に人を殺せるか、とか。でも考えて答えの出ることでもなさそうだし——」

この世界についての私の情報は、すごく少ない。でもとりあえず、思い出せる限りのことを思い出してみる。

トーレ王子。ムルー。プリチュの魔王ロッフ。——運良く、王子が私に興味を持ってくれなかったら、今頃はなかった命かもしれない。何が出来るか、わからない。どうなるのかもわからない。ただ——。

「王子と、行きます」

口に出して進む方向を決めたら、少しすつとして、先を続けて言った。

「人が死ぬのを見てられるかなんてわからないし、戦えるかもわからない。足手纏いにしかないかもしれない。だけどほかに行く道もないし」

レスティさんが、レイルギーナを見つめながら言った。

「中々、予想通りの、答えだな。ムルーもそうだが——あの王子には何か、人をひきつけてやまないものがある。だからこそ魔王もあの子を欲しがったのだろうが——」

レイから目と手を離して、私を見て、レスティさんは更に言った。

「ただ、このまま王子についていくつもりなら、一つだけ覚えておけ。――戦うことに意味などない、重要なのは何の為に戦うか、だということを」

何の為に戦うか――？その問いの答えは、今のところ見付けられなかったけど、その言葉は頭の中で何度も何度も繰り返され、しまいは心の底に沈んだ。

六、一角獣《ラオス》（後書き）

昔、この部分を書いたより後に、馬の高さを知りたくて、乗馬体験コースに行った事があります。乗るところが目の高さ位、というのはその時の経験を基に書き足しています。

いやーあの乗馬体験は……落馬まで体験して貴重な経験になりました……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5959w/>

異世界冒険譚（あなざわーるどあどベンチャー）

2011年10月21日01時40分発行